

# 詩 人 文 人

## 一 序

上代に生きた人々の中には、実際に漢詩賦および漢文の作を残している人が管見によれば七十六人ある。上代文学への漢文学の投影は和歌の上にも大きいのだが、右の人々の作は更に直接の影響であり、万葉集を包む世界として重要な要素となる。その人々は既に岡田正之博士が一覧表にして掲げられ、極めて便利であるが、これに更に願文をもつ石川年足を加えたものが右の七十六人であり、更に亡名氏を加え、懷風藻の序および伝筆者を別に立て鎌足伝の筆者藤原仲麿を加えれば、七十九人となる（懷風藻の編者が淡海三船の場合には別にならない）。これらの人々が数多くの作品を残している事は、大きな漢文学の到着点を示すといわねばならない。

この内で万葉集に作を残し、その名をとどめる人々は約三十人ほどいる。この人々は、先述のような最も直接の影響を

うけている人々というべきであるが、その人々の姿はどのようなものであったか。漢文学と万葉集との交渉の上で、これは看過できないであろう。以下その人々とその作を瞥見してみよう。

その人々の内、懷風藻に作をもつ万葉歌人は従来名があげられて来たが、岡田博士・久松潜一先生・林古溪氏・沢田総清氏・世良亮一氏・杉本行夫氏・柿村重松氏・次田潤氏で若干ずつ相違を見せる。この中で次田氏が、憶良・家持を懷風藻作家としているのは明らかに誤りであろうから、右の相違は要するに万葉集の作者の決定にかかる事になる。また柿村氏が安倍首名をあげられるのは、根拠を知り難いが、「安倍大夫」（9一七七二）をそれに当てられたのであろうか。山田三方を入れる説（岡田・柿村・杉本諸氏）は三方沙弥と同人としての上である。何れも一説としてとりたい。

そこで作の決定如何に拘らず、また懷風藻に限らず、広く

万葉集関係の文人として漢詩賦文を残す人々をあげると次の二十八人があげられる。

飛鳥藤原朝

- ① 大津皇子 ② 河島皇子 ③ 大神高市麿 ④ 文武天皇  
奈良朝前期

- ⑤ 春日 老 ⑥ 藤原 史 ⑦ 境部王 ⑧ 山前王

- ⑨ 山田三方 ⑩ 安倍首名 ⑪ 背奈行文 ⑫ 長屋王

- ⑬ 安倍広庭 大伴旅人 山上憶良 藤原房前

奈良朝後期

- ⑬ 藤原宇合 ⑭ 藤原 麿 吉田 宜 ⑮ 刀利宣令

- ⑯ 石上乙麿 ⑰ 大伴池主 麻田陽春 葛井広成

- ⑱ 石川年足 ⑲ 石上宅嗣 大伴家持 ⑳ 淡海三船

以下これらの生涯と作とを検討する事によって、万葉集の詩との交差の様を考察しよう。

なお長屋王・旅人・憶良・房前・宜・陽春・広成・家持は別稿に譲って反覆をさける。

二 飛鳥藤原朝

① 大津皇子 大津皇子は天武皇子、天智二年の出生、二十四才で朱鳥元年十月没する。母は天智皇女の太田皇女、同母姉に大来皇女があり妃はやはり天智皇女（母常陸娘）山辺皇女である（以上書紀）。懷風藻の伝によると「博覧にして能く文を属す」とあり、その叛は行心による由を見るが（行心は連坐して飛弾へ移される―持統即位前紀―）、かかる渡来

僧らを介して漢文学的教養を得ていた経緯を知る。「天文・卜筮を解す」といわれる方面が直接の経路である。持統紀の「詩賦の興大津より始まる」は岡田正之博士が論ぜられた如く大友皇子との間に問題はあるが、両者その素養の深さを物語る。懷風藻の作は宴詩五言八句、從駕五言八句、詠懷七言二句（後人聯句二句）、五言四句の四首であるが、体制上は後人聯句をもつ事と、臨終一絶とある絶句の事であろう。聯句は記、倭建命と御火焼翁とのそれや、万葉集の家持と尼とのそれが、和歌における連として上代にはあるわけだが、この記と万葉との相違は問答と後を続ぐ事にある。漢詩における前者は問答詩であり、後者はこの聯句と考えられる。この両者は後には二人の合作という意味の歩み寄りを示したようであって、万葉旋頭歌は、むしろこの後を続ぐという性格を濃厚にして来る。つまり万葉旋頭歌は後統性を併存しているのであって、元来、片歌という歌体を認めない説は、顧みてよいと思われる。この場合でいえば命と翁とは連句して一首を完成しているにすぎないのである。ところが、こうした習慣は連句詩にもある。連句詩の最初といわれる柏梁台の詩（漢武帝）は「御火焼翁」を含めた人々が連句するが、二人のものもある。

室中是れ阿誰ぞ 歎息声正に悲し 賈公

歎息亦何為れぞ 但恐る大義の虧げんことを 夫人

傾城も人の美に非ず 千載重ねて逢ひがたし （賈充「妻李夫と連句の詩」玉台十）

軒中の意を懷くと雖も 嬸づらくは鬢髪の内容なきことを

(梁武帝「連句詩」玉台十)

これが問答詩と異なる点は、二句つまり聯をもつて一人の言を終る事であり、全体としても「絶」(長体を絶つ故にこの名がある)なのであって、かかるものが皇子の今の場合である。従つて、これはそのまま家持のそれにつながる。と同時に命の歌も含めて、旋頭歌一般に互る性格と考えるのである。

元来「頭を旋らす」とはどういう意味か。問答になったとしても一向に頭には反らない。つぎつぎとつけがれて出来上つていくところに「旋頭」の意味があるであろう。それがたまたま二句の継承しか出来なかったが、命名者はこの聯句詩の氣持をもつて名づけたと思われるのである。上古の連歌と異なる万葉連歌が漢詩の影響によるものかといわれたのも岡田正之博士である。

次に「一絶」という形も屢々言及して来たように新しい。

六朝末のものであり、飛鳥朝における文化の享受がむしろかかるものであった事は、伝統に拘らない異種文化の輸入に當つては当然であらう。

語句としては「春苑言志」の「倒載」の故事は、晋書にもあるが、直接の典故として、水野平次氏に「蒙求」の指摘がある。林古溪氏は潘岳「西征賦」の「開襟乎清暑之館、遊目乎五柞之宮」その他によつて、この賦の影響をいわれる。「遊獵」の月弓は林氏弓の意としたのに対して、小島憲之氏は月の意で中国の用例によるとされる。太田青丘博士は、この先蹤

として宋玉「高唐賦」の「雲旆を建て虹を旄と為し翠を蓋と為す」北周王褒「輕拳篇」の「俯觀すれば雲蓋に似低く望めば月弓の如し」をあげ、万葉集の「天の海に雲の波立ち月の船星の林に漕ぎ隠る見ゆ」「久堅の天ゆく月を網にさしわが大君は蓋にせり」にある種のヒントを与えたとされた。人麿の歌小島氏も同意見。徐陵「閔山の月」にも

星旗疎勒に映じ 雲陣祁連に上る

とあり、これは戦の状で獵の今の描写と以ている。序でいえばこうした月・星・雲のとりあわせは、これと同時代、持統天皇の

向南山に陣る雲の青雲の星離りゆく月も離りて

(2一六一)

にもあり、この神秘的な挽歌の意味を構成すると思われるが非力それ以上には解明できない(「陳」はむしろ版本によるべきである)。「臨終」の「鼓声短命を催す」は、張文成の朝野衆載に「死則打鼓鳴鐘於堂」とあり、その成立は遅いが、その習俗に基くものたる事は間違いない。

万葉集の作は短歌四首であるが、臨終のもの(3四一六)

と、「大津皇子の御歌一首」(8一五二)の二首が直接内容的に漢詩の二首「臨終」と「述志」とに相對する。前者、

歌は「雲隠りなむ」と唱い、詩は「泉路に向ふ」と詠む。雲への靈魂の回歸は、上代歌に多いが、この朱鳥元年の歌をもつて最初とする。この思想は雲が人格を持つてその中に転生を考えるもので、一種の神仙思想による。これに対して泉路

は、黄泉の思想であり、古い伝承にも多く見出される。岐美二神の黄泉の物語は、新しい蒙りもあるが、その骨子としての黄泉国の設定は、飛鳥朝より古いと思われる、むしろ皇子の詩はそうした古い思想によっている。この間に明らかな詩歌の交流が認められるのである。この詩歌に關しての日夏耿之介博士の読解は深いものをもつが、歌の方が秀れているとされる。西郷信綱氏もそれを引用首肯されているが、この詩の注目点はいかゝる優秀の判定ではなく、「臨終」という重大な時に詩が作られたという事、類型表現ながら、第一句で比喩を叙景に托そうとしている事、などの史的な位置であらう。「詩賦の興大津より始まる」(紀)といわれる、その詩人が既にかかる点を含み持つ詩を作ったという事実なのである。「歌」は別述の如く「相聞」性を根幹とする。雑歌挽歌という公歌への関与は新傾向である。その「歌」が、ここで自らの死をよんでいるという事は大きな発展であり、やはり皇子をもつて創始とするのである。

右の第一句の問題は、次の「述志」と巻八の歌との問題でもある。「山機霜杼葉錦を織る」というのが詩であり、「経もなく緯も定めずをとめ等が織れる黄葉に霜な零りそね」というのが歌であるが、この句に類型のある事が小島氏によって紹介されている。東大寺諷誦文の「霜杼は織錦葉時」弘法大師、遠江浜名淡海図の「天紙風筆画雲鶴 山機霜日織葉錦」である。右の三者は余りにも類似しすぎているのでもし中国原典があれば、皇子の一首は全くその作たる事を失う事

にならう。末期万葉の作が経国集に多く採られている点から考えると、この皇子の一首は空海あたり知っていたかもしれない。歌はつまりはこうした漢詩的表現を和歌になそうとしたものだといえるがそこに「をとめら」という主格を想定した点は独自である。この「をとめ」は仙女なのであり、先の「雲隠る」と思想を同じくする。この詩歌は元来ある面識の如きものではなかったかと思われる(人麿に仙人を詠んだものがある)ので、詩は鶴・黄葉というものの形容がかく増大したのであらう。歌の方は中心を惜秋においている為に一首の纏まりをもち得たのであって、そこに和歌というものが詠嘆を基本とする事を巧まずに認めている態度がある。詩は後人聯句を得て述志となったものである。連句詩の述志というものが、本来常道ではない。

他の相聞二種についても、山の雫にぬれるという誇張表現とか、占にのるといふ表現とかに漢詩や行心の影を感じるものであるが、更に石川女郎は伴田主との間に風流なドラマを展開する。この一場の分析は小島憲之氏の活き活きとした論があり、出典指摘を交えてかかる漢文学的風流の中が皇子をも取まく風流だった事は注意すべきであらう。

②河島皇子 河島皇子は持統五年九月薨(紀)、時三十五才(懷風藻)で斉明四年出生となる。母は忍海造小竜女、色夫古娘で、同母姉妹として大江皇女、泉皇女らがあり(紀)、天智の第二子(懷風藻)となる。従って弓削皇子、長皇子は直接の甥であり、弓削皇子の妃紀皇女、長皇子の子境部王・

文室淨三智努・同邑珍らとも關係が濃い。懷風藻の伝によると、大津皇子の謀叛の密告者であつて「忠臣」だけれども未だ争友の益を尽さざる人物であつたと述べられている。そこに一つの皇子の人間像があろう。

懷風藻の作は「山齊一絶」であるが、万葉末期における「山齊」歌はすべて宴席のものであり、この詩も内容から推すと宴席のものと思われる。曹子建の「公讌詩」も

明月清景澄み 列宿正に参差たり 秋蘭長坂に被り 朱華緑池を冒ひ 潜魚青波に躍り 好鳥枝高に鳴き 神鸞丹轂に接り 輕輦風に随つて移る

という風景描写と

千秋長く斯の若くならん

という挨拶の結びとによつて出来上つており、恐らくは「山齊」という新風な庭園の宴席における詠である。構成力においては何分の一にも足りないが、趣向においては形式を踏んでいるものといえる。林氏は懷風藻中の和習としてこの塵外・物候明・期交情をあげられている。一方からいえば漢文学の一層の導入であり和歌世界へも接近して来つたつたという事である。

歌は山上憶良と混同する有間皇子追慕の短歌が重出する（一三四・九一七一六）。憶良を天平五年七十四才没とすると朱鳥四年のこの作は憶良三十才となり、初作歌を遙かに上廻る事となる。憶良には他に有間追和の歌がある（二一四五）ので恐らくはこれと同時に思われるが、卷九のものが人麿集

のものであり、大宝元年の斉明行幸の折には人麿集の追慕の歌（二一四六）があるところを見ると、川島皇子の作とされているものも憶良の一説は正しく、それを伝えたのは人麿だったのであらう。ここで二つの事を想起すれば、皇子は人麿の献歌がある事（二一九四・一九五）や人麿の詞人という立場と、憶良の辞賦系作家という立場とである。前者は泊瀬部皇女・忍坂部皇子が絡まり確定しないが、つまりは人麿や憶良の代作の可能性があるという事で、これは別述を繰返さない。一案を掲げれば、憶良は川島皇子に代つて結松の歌を詠んだ。それを皇子に感従していた人麿は筆録して歌集に入れた。頃は持統中葉である。人麿と憶良とはほぼ同年配であり、相知の間を想定されたのは久松潜一先生であつた。<sup>(13)</sup>

右の事実は二つの注目点をもつ。その一は河島皇子は歌人、人麿から詩人憶良へという伝統の授受の媒介をなしている事であり、この存在意義は看過出来ないものである。その二は、河島皇子が、配下乃至は親密な範圍にこれら文人を擁していたという事であり、そこに懷風藻詩が更めて顧みられる結果となる。「松桂交情を期」せんとした宴遊は、皇子の山齊を見てのそれであつたのではなかったか。主人としての挨拶を飛鳥朝の文人たちに与えたのであり、幾度かのそれを通して人麿も憶良も新しい風流・文雅を呼吸しつた可能性があるのである。皇子の立場をこのように把えた時、皇子の万葉における漢文学的側面を、最も明確にし得ると思うのである。額田王と人麿との邂逅を媒介するのは弓削皇子である。人麿

と憶良との邂逅を媒介するのは河島皇子だった。その中に近江朝文化と飛鳥藤原朝文化と、天平文化との滞りない授受があったのである。

③大神高市麿 慶雲三年二月卒（続紀）、懷風藻に年五十才とあり逆算して斉明三年出生。終官は左京大夫從四位上。持統六年二月、持統天皇の伊勢行幸に際して農事を妨げる事を恐れて「上表して敢へて直言」し「其の冠位を脱てて重ねて諫めて」いる。

右の事件は重大な事件と思われたらしく、懷風藻の中には藤原麿の「神納言の墟を過ぐ」に

一旦榮を辞し去る 千年奉諫の余

と歌われ、靈異記上巻二十五には奇事の現われた事を記す。無論そうした受取りの中にはあの伯夷叔斉の故事があったであろう（麿の詩には「吾帰するに遂にいつくにかゆかん」とあり。伯叔の歌「我いづくんぞ適帰せん」）。その中高市麿の典型的な儒教性を見るのであって、それを嗜好した歴史を確めておくべきであろう。

懷風藻の詩は五言八句一首、これ又右と無関係ではない。

「病に臥してすでに白髪、意に謂へらく黄塵に入らんと。期せずして恩詔を逐ひ」という句はその風手を示して残さないう。「臣は是れ先進の輩濫りに陪す後車の賓」という句の中には、その朝廷における位置が示されているようか。後車は太公望の故事であり、そうした境遇の中に朝廷で迎えられているのである。高市麿は先の直諫後大宝二年まで史書に現われ

ず、文武朝になって從四位上に叙せられている。この後の期間が迎えられて朝廷に復歸した時であり、すでに「先進の輩」だったであろう。従つてこの一首は、文武朝大宝二年以降の作であろう。第一・二句の憶良との類似は、こうした作詩時期にもかかっている。全体としては陶潜の世界にある一首である。

万葉集では明確に彼の作となるものはない。二首は彼が長門守に任せられた時の宴歌で古歌集のもの（9一七七〇・一七七二）、つづいて筑紫国に任せられた時の阿倍大夫の歌一首（9一七七二）。他にその名の現われるもの、右の行幸時における石上麿の歌（一四四）の左注がある。従つて作者の決定はなかなか難しいが、四四番の左注にも右の直諫事件を記すので、その中高市麿が語られるという伝誦性を多分にもっている。古歌集の第二首は一・二句阿倍大夫の歌と等しいのもその一つの現われである。長門守任は大宝二年である。筑紫国に任ずるといふのは大宰府の役人、恐らくは大貳あたりの官であつたろうが、これを史書に見ない事もあやしい。巻九はこ以下歌集を並べているのに、阿倍大夫のもののみ歌集の歌ではないのであり、かつ一・二句の表記は用字がほぼ等しい。そしてこの古歌集の歌は、境部の老がその用語「おばせる」を用い（17三九〇七）天平十三年家持のノートに復活している。以後この語は天平十九年の一連にしか現われない（18四〇〇・四〇〇三）。かりにこの二首を高市麿のものだとしても、伝誦中の変形はあつたかもしれない

である。

この二首を内容的に見ると「春霞たなびく山を越え」という空想の仕方に、一つの表現がある事はいえよう。またこの阿倍大夫が広庭にしる首名にしる、何れも懷風藻作家で、両者の交渉を認め得る。

④文武天皇 文武天皇は万葉集卷一、大行天皇の吉野行幸の折の一首（七四）の左注は「或は云ふ、天皇の御製の歌」とあり、それを文武と考えた場合である。これは元来作者未詳歌であり左注が文武と確定しないもので、大半の註釈書は文武をとるが、新勅撰集に持統とする（拾遺集は説人不知）。澤瀉博士の注釈は持統と考えるなら元明と解し得るという可能性をあげられる。従って先にあげた懷風藻の万葉歌人の諸掲の中でも、久松先生は文武天皇をあげられていない。この別案の私見も別稿で述べた如くである。

かく疑問は残しても、一往作家の中に加えて考えてみよう。文武は天武十二年（紀の紀年による）生れ、慶雲四年二十五才の崩御、日並皇子の子で天武・持統の孫、母は元明天皇、姉は元正天皇、例の皇儲決定会議によって皇太子となり、ついで即位した事は云う迄もない。紀の世界は持統で終り、文武から統紀に移るという事は、近代が一つそこから始まるという事でもあるが、事実、藤原宮子を夫人とし、藤原史に律令を撰定せしめ、大宝の建元について新令を拡めるという世界は、天平文化への第一歩と見られる。統紀は文武を「博く経史に渉り」と評している。歴代天皇に現われる形容の一

つであるが帝王学の内容は相当整備された漢風になっていたろう事は否めない。「天皇天縱寛仁、愷りを色に形はさず」という性格は、文雅への関心の強かったろう傾向と考えられる。望めば天皇は最高の文学の享受が許される立場にあるのである。時代・性格そして天皇という立場が懷風藻・万葉集に詩三首、歌一首を生んだ事になるのである。

三首の詩は二首詠物、一首述懷で「詠月一首」は別稿で詳しく見た。「詠雪一首」も故事を引くものであるが、「雲羅珠を囊にして起り、雪花彩を含んで新なり」という形容は華麗で漢詩文の導入が主としてかかる形容・描写にあつた点から見て、注目される。「述懷一首」は上に述べた新時代の帝王詩の典型の如き感をもつ。林氏が第一は礼記、第二は易、第三・四・五・六は書、第七史記を用いたといわれたのはその最も優れた表現であろう。

これに対して歌は諸注に「天皇の歌らしくない」といわれているのは問題をもつ。天皇といえども歌にあつてはかかる歌で十分であるのに、そういわれねばならぬ程、短歌は相聞に執しすぎる傾向をもつのである。内容的にはこの歌は二つの注意すべき点をもつ。第一は「下風」という用字。例の「むべ山風を嵐といふらむ」という古今の技巧をもつもので、集中例は他に三例（「あらしのかぜ」と訓ませるもの他に二）、大伴村上の用字で「山下」は虫麿歌集にある。第二は「為当」という語。澤瀉久孝博士がこの歌の注釈で詳しく紹介されており、他にも井手至氏が説かれたように、六朝の

俗語を日本語に当てた用字である。殊に「為当」が集中この一例のみという点にも特殊性がある。

文武天皇は立場としても新しい時代の帝王としての立場にあつて作詩し、一往の作詩技巧をもち、歌は習慣的な形式によりながら用字の上で影響を見せる作家といえる。

### 三 奈良朝前期

⑤春日老 大宝元年三月還俗で僧名弁基、春日賜姓・追大老授位があり、和銅七年従五位下（統紀）であるが懷風藻の「常陸介」は史書に見えない。没年五十二才、かりに和銅七年とすると、天智二年出生となる。近江朝の出生といい、僧といい、還俗といい、近江朝から飛鳥藤原の全期間を生きた奈良初頭に没した一生は、当時の文化の歩みと共にすごした最も典型的な生涯であつたろう。懷風藻の詩は述懷一首、五絶だが、

花色花枝を染め 鶯吟鶯谷に新なり

という技巧を弄する。この事は後に史の項でふれるが、私は一つの漢文学の浸透とみる。それを万葉集に見る事も別述の通りだが

河の上のつらつら椿つらつらに（一五六）

という自作歌にも双方に見せる作家は他にはいない。この歌は他例のように頭韻を踏むものではなく、序詞として用いているのであるが、「行々重行々」といった同語同音の反覆も毛詩のような古いものに多くあり、そうした意識が一つの諧

調観となつて採択されたものであろう。その諧調観は詩歌同じものである。この一首は大宝元年九月の行幸供奉の歌で、或本歌として記されたものだが、恐らくはこの部分を中心に種々な歌が多くの人々によつてなされたものと思われる。一座のさざめきの中に生れた技巧であらう。

歌はこの他に三首（三二八・二八四・二八六）があり、弁基の歌（三二九八）春日の歌（九一七・一七）春日蔵の歌（九一七・一九）も擬せられている。計八首すべて短歌である。その内容は贈答、入唐使に送る歌、行旅の歌で、行旅のものは從駕の折と思われる。やはりその点公性を脱し切れないものだが、二首を人麿集にもつ老は、人麿との間に何がしかの交渉をもつていたかもしれない。総じて作は正式な伝統的な歌であるが、「淵瀬」という反対概念を一語とした造語（集中他例なし）は、漢語の意識であらう。二八四番歌の「あひし子ら」を遊行女婦とする私注の説は賛成である。行幸にそればかり姿を出す。

なお詩は曲水宴のものとと思われる。老は結局公的な場の類型詩歌によりながら、用語に交渉をみせる作家といえよう。

⑥藤原史 史は鎌足の子で養老四年八月薨、懷風藻の六十三才から逆算すると斉明四年出生となる。

先に万葉歌について触れておくと、巻七の七首（一一九四・一一九五・一二一八・一二二二）が左注によつて「藤原卿」の作と知られ、それを史と考えた場合に史は万葉歌人となる。ところが、藤原卿は鎌足・房前・武智麿・宇合・麿と



合せて六人いるわけで、論が分かれる結果となる。内では代匠記が鎌足なら内大臣とかかれ、武智磨は和歌に不堪だからとして出した房前説が有力に支持されているようである。しかし、これからだけでは注釈の説くように宇合・磨も考えられるので、確定はしない。全注釈は大伴家との関係から磨をとる。岡田博士・柿村氏は史を万葉集作者としてあげられる。

紀伊行幸はほぼ斉明四年十月・持統四年九月・大宝元年十月・神龜元年十月と思われるが、かりにこの歌の行幸時を神龜以外のものとする、房前以下四子とも任官叙位以前の事となる。ところが一二一八番と同じ黒牛瀉の紅におう歌が巻九、一六七二番にある。これは大宝元年のその歌である。異った時に類同する歌があったとしても別に不思議ではないのだが、同時の歌とすれば大宝元年供奉のものであろう。時(正月)に史は直広菴、律令撰定の中心に任ぜられている。史の可能性も皆無ではないのである。

懷風藻の詩は五首、風藻中多数の一であり、内容は応詔二首、吉野遊行二首、七夕一首。「元日応詔」は帝業讚美の語を羅列した観のある五言十二句。杉本行夫氏は「観三万国」の出典語として班固「西都賦」をあげる。田村謙治氏が有政敷玄造「撫機御紫宸」の出典として初唐・許敬宗「待旦敷玄造輶旒御紫宸」をひかれるのは当たっている。詩経語の多い事はすぐ目につくところである。「春日待宴応詔」は「淑氣天下に光り、薰風海辺に扇ぐ。春日春鳥を飲び、蘭生

蘭を折る人」という春日の描写が注意をひく。例の蘭亭集序を模したといわれる万葉集巻五の梅花歌三十二首の序には

氣淑く風和ぎ、梅は鏡前の粉を披き蘭は珮後の香を薫ずとある。同じような初春の叙景ではあるが史のこの詩を旅人が知っていたという事は十分あり得よう。両者の間に継承関係はないであろうか。蘭亭記には、「天朗かに氣清く惠風和暢せり」とある。またこの史の「春日飲春鳥 蘭生折蘭人」という技巧は、懷風藻にも史の吉野詩の夏・秋の反覆、葛野王の素、嬌のそれ、同じく弁正の日・雲・遠・長、春日老の花・鶯、藤原磨の反・賓がある他、万葉集にも天武天皇・長意吉磨・坂上郎女・家持にある。林氏は「蘭生」が漢籍にな

い造語だといわれる。総じて応詔詩二首は、類型的讃仰に立ったオーソドックスな応詔詩ながら、初唐詩までの出典をもち、後代天平文壇に継承される立場にあって十分漢詩的技巧に堪能であるといえるよう。

「吉野に遊ぶ二首」は両首とも柘枝伝説をよみ、「漆姫」を七姫とする契沖説に従えば古史の伝説と列仙伝の故事とを連想しているのである。更に「翻って知る玄圃の近きを」と述べる思想、「諸性流れに臨み素心静仁を開く」という句法と発想など、全く当代詩の典型をなす。第一首について杉本氏は文選序と南史、昭明太子伝序とに本づくと言われ、全体遊仙窟の手法をいわれる。詩のみならず、歌もいわゆる「吉野の文学」が、すべて遊仙に蔽われている事は別稿で詳述し

た通りである。先にあげた「夏身夏色古り秋津秋気新なり」という反覆と古・新の対比とは既に情趣・遊戲に迄發達している漢文学を示しているのである。この第三・四句には「昔は汾后と同じくし、今は吉寶を見る」とある。今・昔の対比は文雅の宴の常たる事は小島憲之氏がとかれた。<sup>(17)</sup>万葉には八四番以下の例がある。

「七夕」一首。懷風藻中に七夕詩は山田三方(五三) 吉智首(五六) 紀男人(七四) 百済和磨(七六) 房前(八五) と共に六首ある。その内の最初のものでして注目されよう。養老四年以前である。三方も養老六年罪を得ていて、風藻の性格上公的なものしか残されていないから、これ以前であらう。

吉智首は神龜元年吉田連の賜姓があり、この記名はそれ以前と思われる。和磨・房前のものも風藻の排列順によると神龜三年の長王宴以前となる。紀男人のものは不明であるが、これらによって風藻の七夕詩はすべて神龜三年以前で、養老年間と思われるものが三首、一方万葉集の年代明記のものは憶良の養老八年というものが最初であるので、ほぼそれに先立つものといえよう。七夕歌については別稿で述べたので繰返さないが、これから考えても憶良を日本文字に於ける七夕伝説の紹介者と考える事は出来ない。間人宿禰の歌がそれに先立つ事は後藤利雄氏に説があり、<sup>(18)</sup>事実人磨集のものがあるわけである。憶良から史がその知識を学んだとも考えられない。この結二句の出典として田村氏は「今日楽相楽、別後莫相忘」(魏曹植、怨詩行)をあげられたが、天平六年五月の

作物帳裏の楽書の七夕詩の第一首の結二句が史のものと同じで、かつこの一首は初二句が枚乗の七夕詩と等しいという關係にある。史も樂書主(「辛国人成」という)も原典があったと考える方が自然になる。「雲衣」なども七夕詩の頻出語である。ただここで注意したいのは、七夕詩でも華麗な邂逅の様を空想するものがあるのに、ここに述べられているのは悲傷であり、かかる悲傷的な面が取入れられているのは七夕に対する当時の感情を現わしているよう。漢土のそれが多く物語的構想をもとうとするのに対して、わが国の七夕歌が多く瞬間的なものたる事と等しいのである。

史の歌は先述の如く不確実であるし、作も強く交渉を見せるようなものは少ない。紅の裳をひく大宮人の遊び(一二一八)は、宮体詩の世界であらうし、玉津島を包んで持つてゆくというのも漢文的誇張表現であらう。

⑦ 境部王 卒年は不明だが、統紀の最終記事養老五年、懷風藻には二十五才とある。林氏は長王宅の宴を神龜二、三年に想定しておられて、その頃まで生きたかとも思われる。万葉集には穂積皇子の子という下注(16三八三三)があるが、紹運録には長皇子の子とする。詩は長王宴のもの五言八句と秋夜山池の五言四句の二首。先詩は「歌は是れ飛塵の曲」とある以外特定の出典や故事はない。のみならず、この

新年寒氣尽き 上月淑光輕し  
雪を送って梅花笑き 霞を含んで竹葉清し  
という表現は、卷十春雜歌の諸歌

昨日こそ年は果てしか春霞春日の山にはや立ちにけり

(一八四三) 詠霞

寒過ぎて暖来たるらし朝鳥指春日の山に霞輕引

(一八四四) 同

雪見れば未だ冬なりしかすがに春霞立ち梅は散りつつ

(一八六二) 詠花

の如きものと、極めて相近いものを感じるのである。第一首一・二句の曆の上でのとらえ方、第二首、一・二句の寒暖の意識と詩の初句、同じく第三句の枕詞の使い方と詩の第二句、第三首の雪・霞・梅の組合せと詩の三・四句、といった点である。「輕引」にも、詩の二句の如き心の躍動を表わす感情はなかつたろうか。ことに「朝鳥指」は金鳥の伝説による中国趣味の用字である。この歌の用字については小島氏が論じておられる。「秋夜山池一首」は四言体の、類の少ないもので「菊酒」が注目される。重陽の節会はまた文献に見えず、菊も万葉には歌われていないのだが、この詩によって既に当時その習慣の伝わっていた事を知る。西王母伝説などとも等しく、文献にないからといって否定出来ない例の一つである。琴を「桐琴」といつている点は注目点の第二で、例の旅人の「梧桐日本琴」という琴賦をまねたものが一方にある事と併せ考えると、詩歌が同じ知識圈にあった事がわかるのである。

歌は戯笑歌が一首(16三八三三)、穂積皇子の子とすると、皇子の口誦歌(16三八一六)の系統を引くものであろう。そ

うした文学の色合いが養老末年に想定出来るという事は、もはやただならぬ漢文学の滲透と考えてよいのである。内容に關しては別稿の詳述に譲る。

⑧山前王 山前王は忍壁皇子の子(統紀宝字五年三月)その子に芽原(茅原・葦原とも)王(統紀同上)・池原女王(統紀宝龜十一年八月)があつて、妃に栗前連の女があつた(同上)。慶雲二年從四位下、養老七年散位で卒している(統紀)。懷風藻には刑部卿とある。忍壁皇子の文化的生涯の影響は山前王の上にもあつた事であらう。

懷風藻の作は「待宴一首」、初六対の五言八句で最も典型的なものであるが、中聯に四・九・千・三という数字を故意に用いた形迹をとどめる点、特色がある。初句「至徳乾坤に洽く」という歌い出しは、人麿に詳述した頌歌の公式である。更に第三の点として「清」という用語が注意される。

清化嘉辰朗かなり

九域正に清淳

という表現であるが、何れも天子の徳の表現であり、杉本氏(註釈)が典拠とされる李密の陳情表「聖朝に速んで清化に沐浴す」にも見られる如く、また風藻中にも「澄清」(四、御苑の池が)「清蹕」(二〇、天皇の車)「清生」(六四、聖世)の如く、天子の徳の及ぶ表現となっている。無論、單なる現代語の「きよし」に相当するものもあるが、「清」が元來「すぐれた」という意味をもつ事、たとえば「清華」の如く、これの拡大したものであろう。

一方、万葉集の中にも、かかる「きよし」という語がある。集中の「きよし」は頻出するもので引くに堪えないが、例えば

山川の清き河内と（1336）人麿

の如き形容が讃歌となり得る条件は、聖化の及んだ地という表現だからであり、まさしく山前王の「九域正に清淳」というのと等しいであろう。ことにこの語は吉野讃歌に頻出し、あとは家持園の人々が用いるものである点もその固定性を示している。同類としては「神なびの清三田屋」（1332）があり、例の「大夫の伎欲吉彼の名を」（1840）九四、類例20（四四六五）の「きよし」も「優れた」意で、先の「清華」の用法に相当する。「さやけし」との併用（1332、1334、9173）も、従来は「さやけし」との区別が明瞭ではなかったのではあるまいか。

私は「きよし」が「清」の翻訳語としても用いられたと考える。その詩歌共用の語を、山前王の詩は示すのである。

歌は長歌一首（3423）と或本反歌二首（3424・四二五）が考えられるが、長歌左注は人麿作という異伝を、反歌左注は紀皇女への石田王の歌の王の代作という成立事情の相違の一説を記す。元来は山前王が石田王の代りに紀皇女の挽歌二首を作り、後石田王の挽歌を作り、後にこれが一本になった本があったという事情を記すのであるが、何故に山前王は石田王に代って作ったりしたのか。それを私は以下のよう考える。長歌が人麿の代作であろう事は別に述べたが、

人麿は常に実作者であり、今の場合は石田王が形式作者である。山前王は人麿を（恐らくは父の關係で）擁していた為人麿に代作を命じたのであろう。その背の君たる石田王の立場に立って。ここで想起されるのは、例の中皇命の場合である。中皇命は内野の歌を老に作らせて献った。そのような老をもつていた為に紀伊行幸の折に斉明の立場で歌をよんだ。実作は老によっている。この關係と全く等しいのが今の場合ではなからうか。長歌

霍公鳥 鳴く五月には 菖蒲 花橘を 玉に貫き 鬘に  
せむと 九月の 時雨の時は 黄葉を 折りかざさむと  
は類型的ではあるが

春べは花折りかざし 秋立てば黄葉かざし（2196）  
と等しい（吉野讃歌もほぼ同じ）。殊に生前の姿の描写で「現身と思ひし時に」というのと同じ把え方でもある。反歌「手にまける玉は乱れて」（3424）は「玉ならば手に巻き持ちて」（2150）という近江朝挽歌の伝統である。第二反歌が人麿の妻の死と似通う事も明瞭であらう。

山前王はかかる立場に立つ作家である。先述「清」が大津皇子にあり王にあり、「きよし」が人麿に始まるという事は偶然ではないのである。

④山田三方 その伝はわずかな史書の記事からしか得られないが、持統六年十月務広肆授位、かつて学問僧として新羅に渡りこれ以前に還俗したようである。慶雲四年四月正六位下、和銅三年正月從五位下、同四月周防守、養老四年正月從

五位上、慶雲四年四月養老五年正月襲學、養老五年侍東宮文章博士（以上統紀）そして大學頭（懷風藻）という記録はその学的内容を示す。「御方笈を遠方に負ひて蕃国に遊學す。帰朝の後生徒に伝授す。而して文館に博士たり。頗る文を解き屬す。」（養老六年四月詔）といわれている。養老六年四月の犯盜の事は余りにも有名であるが、その貧は普通いわれているように国守の故ではなくて、統紀に記録を絶つ養老五年あたりに官を退いていたのではあるまいか。もしかりに万葉集の三方沙弥を同人とすれば致仕の後再び仏門に入った故の呼称と考えざるを得ない。万葉歌は卷二（一二三・一二五）

のもの、卷四（五〇八）のもの、何れも藤原朝・人麿期のものであるが、卷十九（四二二八）のものは北卿と同席している。房前の活躍は大宝三年以降で、恐らくすべての作が還俗後のものであろう。それを三方沙弥と呼称する事は満誓の場合に照らしても不自然だからである。ただ三方沙弥と三方が同一人かどうかは確実にならない。姓でなく名で呼称される点が疑問として残る。後代には三方姓のものも統紀にあり、三方王もいる事で、三方は姓でないかと思われるふしがある。林氏新註は「通称ならん」とする。

なお、山田史は宝字三年十二月に白金が、宝龜元年十一月に公足ら三十人が宿禰姓を賜わっているが、姓氏録には「山田宿禰周の靈王の太子晋の後」（右京諸蕃）「山田宿禰魏の司空、王昶の後」（河内諸蕃）とあつて帰化族である。右の白金は明法博士で養老令の撰定に与っている碩学の士であ

り、一族の教養が知られる。

その懷風藻作品は宴詩二首と七夕一首。宴詩の長王宴の邀宴詩は長序をもつ。序は夥しい故事・故辭を踏んでいるが、「歌台に塵を落し」は集中五例「西園の遊」は二例を見る。

詩の「牙水調を含んで激し」も集中二例のものである。「虞葵」は上句との関係上故事のありたいところだが、沢田氏註釈のように虞美人をとるとここ一例序の「窓鷄」も一例である。水野氏はこれも蒙求由来とされる。大野保氏は「同心之翼」に同心鳥を考えておられる。語句の典故としては、王勃の諸作があげられる。「請ふ西園の遊を写し兼ねて南浦の送を陳ぶ」の対が滕王閣の序の「昼棟朝に飛ぶ南浦の雲、朱簾暮に捲く西山の雨」の対と同型の故事をあげるものであり、「琳琅目に満ち蘿薛筵に充つ」は同じく蓮池に遊ぶ序に「琳琅目に觸り珠玉在傍」、同綿州西北の樓に登る走軍の詩序に「蘿薛を玄門に促す」とあるのと同じく「郢曲与巴音響を雜ふ」という「与」は別述の如く歌にも現われる詩文的発想であるが、これも滕王閣序に「落霞与孤鶩齊しく飛び、秋水共長天一色なり」とあり、三方の下にも「珠輝共霞影相依る」と続けられる。また

寒蟬「唱」而「柳葉」飄 霜雁「度」而「蘆花」落」という発想も

潦水「尽」而「寒潭」清 烟花「凝」而「暮山」紫

（滕王閣序）

その他王勃に見られるものに依つたといわれている。こう

した点に即していえば、最近の初唐詩の影響をはやばやと受けているのである。小島氏のいわれる「新しがりや」なのである。語句の元の原典は「南浦之送」「小山丹桂」が楚辭、「琳琅」が尚書、「我を酔すに五千の文を以てす」が老子、「我を博むるに三百の什を以てす」「飽徳の地に舞路す」詩の「靈台」が毛詩を踏んでいる。「清淡振発」という語も見えるが、要するにこれらは思想的な根拠をもつものではなく、修辭としてのそれであるに留まるのであろう。七夕詩は既にふれたが、靈姿・仙駕といい、神仙的に美化され、後続の五・六句も、完全な後宮美女の形容である。洛浦の連想があろう。節宴でも更に注意されるのは上巳の詩で五絶の体をとるが、初二対。わが国文学に見える最初の上巳宴である。史書には顯宗二年・三年のものが初見であり、飛んで宝字六年のものをみる。顯宗朝のものが事実か否かは疑わしいが、決して宝字六年までそれがない事はない事な懐風藻の詩は示すのである。重陽と等しい事情がある。養老年間に既に詩が作られているという事は万葉人も十分それを知っていた事を意味するのである。

三方沙弥の万葉歌は園臣生羽の女との相聞中に二首（2・二三・一二五）およびその伝誦された一首（6・一〇二七）、相聞一首（4・五〇八）、人麿集の一首（10・二三・一五）、久米広縄によって伝誦された長歌并反歌（19・四二二八・四二二九）で長歌一首短歌六首であるが、他に「沙弥霍公鳥の歌一首」（8・一四六九）を三方沙弥とする人が多い。第一群卷二のもの

のは石川女郎の戲笑的物語の一群（二・二六—一二九）と同類と認められていたろうもので、切情はない。この三首構成は、題詞の常道から見ると三首とも沙弥の歌だのに問答になる。つまり連句詩や問答詩の意図になるものである。そしてその可能性は他の歌から推して捨て難い。またこの歌の表現は例の「結髪」という事の和訳である。沙弥は「結髪為夫婦」という漢籍頻出語から幼い娘子と契りを結んだ。卷十六の雜歌「橘の寺の長屋にわが率寝しうなるはなりは髪上げつらんか」（三・八二二）と同じ事情である（この場合、うなるはなりは童女の意で「尾句に重ねて著冠の辭を云ふべからず」とは、同類の句という意で、若冠と著冠とが同じではない）。従って「結髪」という語と習慣に対しては事実が伴わない事になる。そこにこの一首が生まれたのであろう。「見る」という語は契りを意味している。単に髪の状態を見る、見ない、では何ら意味をなさぬ歌である。そこにこの題詞の活きる余地がある。「いまだ幾時も経ぬに病に伏して」訪れない間の娘子の、他の男への心移りを不安がっているのである。それを髪に托して表現したところがこの歌のこの位置であらう。あの伊勢物語の「君ならずして誰かあぐべき」というのも余人とは結婚しないという意をのべるもので、男の歌も求婚の歌である。娘子の歌も親たちの結婚の催促に対する感情である。そうしたところにこの三首の「風流」があった。「橘」「八衢」という語も、この問答詩や「風流」の出どころを示していると思えるのである。

三方沙弥の歌は、享受の世界が伝誦にある。右の第二首も天平十年諸兄宅の宴歌として高橋安麿が語り、その先に豊島采女が口吟している。この事情は卷十九の長歌も同じで、三方沙弥が房前の囑によって作り（又は誦し。「依」か「作」か本文によって異なる）、笠子君が伝え、久米広縄が伝え、更に家持が聞いて記したという事になる。人麿集のものも作者未詳歌で一説沙弥の作というものであつて、沙弥の作であれば伝誦の間にその作主を忘れられたのであらう。人麿集の歌たる事も、純粹嚴正な創作歌とはいひ難い。思うに民間流布歌の如きものを導きながら口誦によって作るという傾向を沙弥はもつていたのではあるまいか。卷十九の長歌は片歌形式から始まり五七が二回、最後は八音句を二度繰返すという異例な形式である。初三句で自ら切れる一首は後が偶数句の口誦型になり、こうした形をとつたのは、それだけの曲節があつたのではないかと想像させる。そしてその内容たるやおよそ無内容で、唯一即興性のみに依存している。かかる位置が伝誦的享受を導くのであらう。

三方沙弥は、かかる点にいる。その戯笑性や歌体など、漢土文学のかなりな浸透によるものといえるのである。ただそれが山田三方かどうかは判らない。一説に従つて論じたまでであり、むしろ私見としては別人とすべきかと思つてゐるのである。

⑩阿部首名 天智三年出生、神亀四年卒、年六十四才（続紀・懷風藻）。万葉歌人に数えるのは、高市麿の長門守任の

饑歌（9一七七二）の故であり、柿村氏があげておられるがこの「阿部大夫」は広庭という説の方が万葉学者には広く支持されている。広庭は斉明五年生、天平四年薨、年七十四才（続紀・懷風藻）ではぼ生涯が等しい。広庭は養老二年、首名は同三年に従四位上と、全く等しく、初位が、首名慶雲元年従五位下、広庭和銅四年正五位上で、史書に見えるのは広庭がやや遅い。従つてこの両者は何れとも判断できない。可能性として双方をあげる。

首名の詩春日応詔は、梁塵・仁智・湛露といった故事や出典語をもつが「舞衣樹影を揺かし」とか「花と月と共に新なり」とかという描写は窮屈さが無い。和歌への接近というべきであらう。花と月との景物は万葉集では

ひさかたの月夜を清み梅の花心開けてわが念へる公

（9一六六一）

誰が苑の梅の花かもひさかたの清き月夜にここだ散り来る  
（10二三二五）

の如く現われる。これらの先蹤というべきである。

⑪背奈行文 続紀最終記事は神亀四年十二月、従五位下だが、武智麿伝には神亀五年六月に「此の時に当つて」として「宿儒肖奈行文」の名があげられている。懷風藻は従五位下大学助、年六十二。かりに神亀五年を手がかりとすれば、天智六年出生となる。ほぼ神亀末年に没したのであらう。その父は高麗福德（続紀延暦八年十月）だが、福德は天智七年李勣に従つて高麗を討っているから、その「国家に来帰」（続

紀同上) した前後に行文は生まれた事になる。且つて武蔵國に住し、その甥福信が「小年」の時「都に入」ったとある。福信は延暦八年八十一才だから、かりにこの「小年」を十年頃とすれば、養老三年前後となる。養老五年には第二博士正七位上で褒学賞賜があるのだから、既にその頃には一往の學問を積んでいた事がわかるが、武蔵居住の事を考えると、中央に學んだ事と同時にその家にあつて受けついで學問もかなりあつたのではないかと想像される。少くとも飛鳥朝には中央の空氣に触れていなかったであらう。そうした一代の帰化人というものは、他の作家にはいない。行文はその点も大學助、明法第二博士という点も、最も漢文學的の近よりを示す作家である。恐らくはそれに関連すると思われるのは、「上巳禊飲応詔」の一首で、これは典拠多く帝業の讃仰に終始したものであるが、林氏は全句が四對をなす事をあげて盛唐の先驅と思われるものだといわれている。因みに神龜元年(七二四)は玄宗の開元十二年、安祿山の叛に先立つこと三十一年で孟浩然(七四〇没、以下同じ)、王維(七五九)、李白(七六二)、高適(七六五)、杜甫(七七〇)、また王昌令、王之喚、岑参といった人々の活躍していた頃である。高麗への唐文化の輸入は、わが国とは比較にならぬものがあるので、背奈一族の教養はかかる今日的教養であつたと考えてさしつかえないのである。

しかし、この詩には和臭もある。第三句「竹葉禊庭に満ち」といって、竹葉での御禊が、上巳宴にあつた事がわ

かる。この節会が禊除不祥である事はいふ迄もないが、この竹は神樂歌などに見られる思想と同一であらう。

こうした右のごとき交渉は、万葉歌の中にもある。集中歌は先の春日老と同じく卷十六の戲笑歌群にあり「倭人を誘る歌一首」(三八三六)は、第一に倭人を誘ふという題材自体、極めて「博士」らしい題材であるが、第二に「左毛右毛」と「かにかく」に「左右」を当てている。「左右」は俗語で「どうせ」「どのみち」といった意味を現わす語であるから、それに相当する日本語として「かにかくに」に用いる事は當を得ていよう。この語の集中例は

左右 虫麿集(9一七四九)

大伴四綱(4六二九)

仮名書憶良(5八〇〇・八九七)

坂上郎女(4六一九)

坂上大嬢(4七三七)

佐伯赤麿(4六二八)

市原王(3四一二)

他に作者未詳が三首(卷七・卷十一)ある。この用語も用字も行文が最初だという事がわかる。第三にこの俗語という事についてだが、「かにかく」という語は日本語としても正格の歌語ではなかったのではないかと思われる。この一首の中には「兎手柏」「両面」「倭人」という語があるが、これらは全く孤語か或いはそれに近いものである。「兎手柏」という語が他に一例あるのみであつて、他二語は全くないのだがその例は下総國の防人がよむ「千葉の野の兎手柏の……」(20四三八七)である。或いはこれは東國、殊に武蔵下総の方言ではなかったか。そうした方言を含む俗語であればこそ、他



には全く用例を見ないものが集中する結果になるのではないかと考えるのである。こうした慣例的歌語によらない歌をつくる事も、「宿儒」背奈行文なのであろう。この一風変わった歌は、先の漢詩がその中で斬新だった事と無縁ではないのである。そうした詩と歌との結縁が、かかる戯笑歌の世界にあったという事も注目すべき事なのである。

他の一詩、邀宴のものは初六対で小雅（詩）大同（礼）らの言辭や李陵の故事が見える他、「桂を攀ぢて談叢に登る」の句があり、月の桂は全九例を見る最も多い故事であるが、万葉集にも「月の内の楓」（4六三二）「月人の楓」（10二二〇二）の如く見られ「桂」という用字での受入れはなかったようである。この詩は更にそれと「攀桂」と発展させたものである。ここに従来引かれた出典の中では、杉本氏の招隠士が最も普通だろう。思想的には「談叢」が注意される。こうした宴の意味する解脱性がいか様に考えられていたかという事であるが、単なる文雅の宴という印象を強くうけとめてゐる、何ら思想的な深さはないのであって、外形的な憧憬が根拠かった事を示すのである。また典故として「杯酒皆月あり」が李白の「酒を把つて月に問ふ」の点化であると沢田氏はいわれる。その影響関係という事になると先掲の如く最も今日の的なものとなり、あり得なくはけしてないが、類似のものは

○君に勧む且く杯中の月を吸へ（東坡「月夜客と飲す」）

○梁王池上の月昔梁王の樽酒の中を照す（李白「梁王の樓

霞山の孟氏の桃園の中に登る」）

○桂花影を飛ばして盞に入り（馬子才「邀月亭」）

の如くある。ただこの李白の「酒を把つて月に問ふ」詩には人明月を攀ること得べからず

とあって「攀（明）月」という語を等しくする。しかし内容は別であろう。広く酒月の宴の表現と考えるべきであろうか。

⑩安倍広庭 安倍広庭の閼歴は統紀、懷風藻に詳しい。安倍御主人の子として斉明四年出生、和銅から天平初年にかけて伊予守・宮内卿・左大弁・参議をへて、天平四年二月中納言・従三位・催造官長官・知河内和泉事で薨じている。薨年七十四才。島曆はその子。長王の後を追った一生であり、神龜四年三月には王と共に宣勅し、天平元年八月王の薨後にも宣勅の事がある。

その作は懷風藻の春日侍宴・長王宅の邀宴各一首の詩と、万葉集の短歌四首と計六首である。宴詩五言十句は初八対の類型だが「国風」「濫吹」以下故事の辭がなく、描写的な点が一つの特色である。邀宴詩五言八句も初六対で凝った表現はない。この「浮菊の酒」とは重陽に当たっていたという事ではなく、杉本氏があげられた「盃浸菊花」（王績「贈李仙者詩」）「菊花宜泛酒」（楊炯「和酬魏州李司法詩」）の如き風流であらう。梅を酒に泛べる風流（万葉集梅花歌五八四〇）であるが、追和歌の

梅の花夢に語らく風流たる花とあれ思ふ酒に浮べこそ

(五八五二)

の結句（一云も同じ）も右の楊柳の詩にも見える「宜泛酒」の翻案であるに違いない。

しかし右のような詩の平明調は万葉歌では全く反対の結果となる。流麗な漢文調は、拮屈な和歌調を造り上げていているのである。

A 児等之家道 差間遠鳥 野干玉乃 夜渡月爾 競敢六鴨

B 雨不零 殿雲流夜之 潤湿跡 恋乍居寸 君待香光

C 如是為管 在久乎好叙 靈剋 短命乎 長欲為流

D 去年春 伊許自而植之 吾屋外之 若樹梅者 花咲爾家

里 (8 一四二三)

すべて歌は、余りにも拮屈である。そしてこの拮屈調は、他ならない漢詩的発想なのである。この四首の色彩が奈辺にあるか、更に若干の点を辿ってみるならば、第一に四首は助詞および活用語尾表記の省略される事が多い。殊にDはそうであるが、そこから来る特性は視覚的に極めて孤立語的だという点である。試みに右から助詞および活用語尾の表記を除いて見ると

A 児等家道 差間遠 (野干玉乃) 夜渡月 競敢鴨

B 雨不零 殿雲夜 潤湿 恋居 君待 (香光)

C 如是為 在好 (靈剋) 短命 長欲

D 去年春 (伊許自) 而植 吾屋外 若樹梅 花咲

の如くなる。枕詞と適当な漢字を得られず仮名書にした「がて」「いこず」は止むをえない（「鴨」は例外、右の大勢に則して書くならば「敷毛」などとあるべきところ）が、右はほぼ完全な漢文表記となるであらう。これを近世以来の漢文訓読に従って訓んでみると

A 児等之家道 差間遠。夜渡月。敢（競）（敷）。

B 雨不零、殿雲、夜。潤湿。恋居。待。君。

C 如是、在好。短命。欲。長。

の如く訓み得る（ハ）は補った字。「殿雲夜」は「雲」の用法を変える事になる。」第二に、二字構成になる語が非常に多い。「児等」「家道」「間遠」「夜渡」「殿雲」「潤湿」「短命」「去年」「屋外」「若樹」の如くである。「殿」は借訓であるが、かかる借訓はこの二字構成の意識から出ていると思われる。これ又、漢語的表現である。第三にこの表記には特殊な用字がある。「差」は集中他に人麿集の一首（七一七八）のみ。「潤」「湿」に他例がない。「不零」「如是」が漢文表記を導入したものと見る事は人麿集で見だが、これら特殊な用字はやはり漢字への素養を現わすと見るべきである。又右にもあげた「屋外」（には）の訓もある）は、それぞれ別の訓仮名によるとも考えられるが、私はそう思わない。「やど」の用字「屋戸」「屋前」「屋外」を集中に見ると、最も普遍的なのは「屋戸」で巻も二・三・四・六・八・九・十・十一・十二・十八・十九に見られるもの五八例あ

る。これに対して「屋前」は卷三・七・八・十と、かなり限定され三四例。そして「屋外」は卷八・十のみで四例しかない。内巻八は、つまり作者判明歌ではこの広庭の一首となる。そして「屋外」は漢籍に用いられる語であり、それを用いているのであるが、「屋前」は「庭前」「階前」といった漢籍語を転用した表記であらう。「屋戸」は文字通りで、最も日本語である。「靈剋」の用字も、坂上郎女(4678)憶良(5897・904)家持(6104)という偏在ぶりを示す。なお第四にこの歌の題材には宴祖餞と梅花とをもつ。Cはこれ自身には何も示されないが、天平四年宇合の西海道節度使拜命の虫麿の歌(971・972)聖武天皇の賜酒の歌(973・974)につき、次は天平五年に移っている。もしこの折のものとする、懐風藻にも宇合のこの折の五言詩があり、同時に詩歌計六首が作られた事になる。詩も作り歌も作られる饗宴の上での歌が右のCであれば、右にあげた如き作の内容は自らその空気を伝えるというべきであろう。梅花の情趣が漢土風である事はいふ迄もない。この無意味な一首は、単に梅を詠むという事に主眼があるのであらう。それを拡大して考えると、この一首は宴席の歌であったかもしれない。小島氏のいわれる古今の対比もこの歌はもつ。広庭の歌は右のような特性をもつ。元来が詩の立場に立つて歌をそちらへ引寄せた形で詩歌の接触を見せるのである。これは又詩にとつては当時の詩らしくない平明なものを作る結果にもなっている。ここでは歌への引き寄せがあつて、そ

の交互作用の中に立つ作家が広庭であつた。

#### 四 奈良朝後期

⑬藤原宇合 史の第三子として持統八年(補任・懐風藻一本)或いは慶雲元年(懐風藻)に出生、天平九年三十四才(或いは四十四才)で薨するまで、朝廷に顯官を歴任する。靈龜二年の遣唐副使は注意すべき記事であらう。養老三 years 正五位上でこの辺りから朝廷での活躍が認められる。時に年は十六(或いは二十六才)である。式部卿は神龜元年四月に見え、その文学は別稿で述べた。万葉集に關係をもつものは神龜三年十月の知造難波宮事、懐風藻に關係をもつものは養老三 years 七月の常陸守、天平四年八月の西海道節度使でそれぞれ二十三才(或いは三十三才)、十六才(或いは二十六才)、二十九才(或いは三十九才)である。終位は正三位である。その作は懐風藻に六首という最大の詩数を見せ、経国集には賦一首、万葉集には短歌六首がある。岡田正之博士は尊卑分脈に「特留心文藻天平之際猶為翰墨之宗有集二卷」とあり、遣唐副使たりし事、懐風藻に六首もとられてゐる事をあげられ、その賦をわが邦における賦の始めとして宇合を高く評價されている。詩は宴詩が二首、贈答詩が一首、述懐が二首、内二詩に序があり、その序、殊に「暮春南池に曲宴す」のものは完全な四六文であり、「常陸に在つて倭判官の京に留れるに贈る一首」は十八句に及ぶ集中最大の長篇詩となつてゐる。そして一方「西海道節度使を奉ずるの作」は五絶で、賦

も上代人には少いもの、何としても上代最高の文人の一人であらう。右にあげたように二十三才（或いは三十三才）前後の作が常陸のものであるから、曲宴詩はそれに先立つ。三十四才（或いは四十四才）の薨年まで年若く才氣溢れた作家の華々しい詩篇である。

長王宴の詩は七言八句で初六対、七律の形は珍しいものである。蘭・菊・白露・丹霞を対にとった美しいものであるが「大隠何ぞ用ひむ仙場を覓むるを」という結論が述べられる。これは一種の挨拶と思われる要素を加えているので、その思想的帰趨をそのまま受取る事は出来ないが、こうした表現をする事自体は、字合の場合さ程術学的ではないのである。不遇を悲しむ詩や節度使の詩、判官への贈詩に一貫して流れている感情は、形式にしては余りにも深刻すぎる懷疑をもっている。「二毛已に富めりと雖ども万巻徒然として悲し」（悲不遇）、「行人一生の裏幾度か辺兵に倦む」（奉節度使）、「人を知るの難き、今日のみにあらず。時に遇ふの罕なる昔より然り」（贈判官）という思想・感情は、字合の一つの特色になっている。多くの人は、顯門に生れて若く官位を歴任しつつある字合が「不遇」であろう筈はないという態度をとる。悲不遇の詩も倭判官の爲にしたという説もある。しかし私はそれに疑問をもつ。字合は靈龜二年八月から養老二年十二月まで唐に在り、翌三年七月常陸守に赴任する。在京はわずか七ヶ月。その後神龜元年四月の式部卿任まで五年足らずであるが、憶良の「鄙に五年住まひつつ」に照らしても、そ

の間常陸守および管安房上総下総三国の仕事に従ったろう。のみならず、式部卿と同時に持節大將軍となり十一月に始めて来歸している。つまり養老三年七月から五年四ヶ月を東國で過す事となる。以後も難波や畿内に出、天平四年八月に西海道節度使となる。薨年の統紀には大宰帥とあり、それが加われば生涯の大半は京以外に過しているのである。そうした経験が懷疑に追いやっていると考える。そのないのは宴のもののみで、これは養老三年の暮春である。七ヶ月の在京後常陸に赴任した頃から形作られた感情だったと思われる。更にそれを助長したものとして、彼の若さと彼の学才とがある。身に溢れる自負がこの二つから出て来たであらう。それを右の経験に組み合わせた時に、その落差は一層著しくなる。その中に生まれた思想が右の諸詩に見えるもので、これは偽らざる感情に基くものだったといえよう。しかしそうした感情をたやすく表現せしめたのは時代である。当時の文化が規範とした漢文字が六朝のそれであった事はいふ迄もない。「時に遇はず」という思想は六朝のそれであって、その典型の中に彼の感情が詩となって現われたのである。そうした感情を堂々たる詩に托し得たところが、字合の作家としての優れた点である。

一々の詩の語句を見ると暮春曲宴の詩は金谷・竹林といった頻出の故事が連想対比され、その序の書き方「蓋各言志探字成篇云爾」も一定の書式（人探一字四韻、成篇云爾）登綿州西北樓走軍詩并序等）で「各志を言ふ」は論語に出て来

る、いわゆる「言志」の詩ともなつて用いられる語である。

贈判官の詩は、懸樹・叔孫・和璧・桓公寧戚・子猷（何れも蒙求によると水野氏はする）・呉馬瘦塩らの一般的故事、孔子に關して「宣尼魯に返り詩書を刪定す」、老莊風には「鳬鳥の飛ばむと擬するを廻らし」と王喬を引用する。この上に「寸心の嘆」を示すのである。「採葵」は「葵を採る、根を傷ふなかれ、根を傷へば葵生ぜず。交を結ぶ、貧を羞しむなかれ、貧を羞しむれば友成らず」（古詩二首、第一）の語である。詩の王子猷と戴安道との引用は既にあげたが「李と鄭」とは、李白と鄭虔とであろうか。そうなら同時代的に關する新しい知識で、その文学の源泉を見る上に大いに問題になる（杉本氏註釈は李庸と鄭玄とし、沢田氏李白と鄭虔とし、林氏不明という）。悲不遇の詩も典拠の多いもので、太公望伝説・蘇武・東方朔・朱買臣・楚冠といった人名や故事を見る。語句としては搏拳・相忘・二毛らがあり、悲不遇という題意の下に、これらは注目される。「心を馳せて恨望す白雲の天 語を寄せて徘徊す明月の前」が「相思ふ明月の夜 遐邇たり白雲の天」（楊炯「有所思」）をとつたとするものが田村謙治氏の説である。（この詩は乙磨の「相思知りぬ別れの慟しみを、徒、弄す白雲の琴」の原典でもあるとされる。）長王宴の先掲「大隱何ぞ用む仙場を覓むるを」は、吉野詩の「朝隱暫く簪を投ず」と共に招隱詩、たとえば王康琚の反招隱詩、左思の招隱詩らを踏み、またヒントを得たと太田青丘博士はいわれる。<sup>22</sup>この吉野詩には他に陸機・張衡と

いった文選作家の名の見える事が注目されるが、「天高く嵯路遠し」は張騫その人よりも、右の如き吉野遊仙の態度から出たものであろう。「清風阮が嘯に入り流水嵇が琴に韵く」「河廻つて桃源深し」という語が並んでいる。経国集巻一の棗賦も芸文類聚果部の詩句を参考にしたものだと小島憲之氏は主張される。<sup>23</sup>「西王母の玉漿」というのが注目されるものだが、東方朔の引用、「朝に周雨漢露を承け」「海に投じて謬公の遠慮を伝ふ」等の典拠語もあって、懷風藻と等しくおむね類型の叙式である。

字合の詩は、こうして夥しい故事を踏んでいるが、思想的にはかなり深いものを見る。その老莊風な傾向は時代の公約数としても見られるものではあるが、詩の内では必ずしもそうではない。その中にある字合の詩の表現はすぐれた漢文学の素養を示すものといえよう。

一方、万葉歌の方は集中六首すべて短歌で、難波供奉の歌（一七二）、知造難波宮事の折の歌（三三二）、他は虫麿集の歌（九一七・二九一・七三一）と事情を記さない一首（八一五・三五）である。あれ程詩賦に優れた作を残した字合に対して、万葉集の取扱いは疎遠の感をもつが、この四種は家持周辺になったと思われる万葉集の巻九までの、巻七を除く八巻を構成した四種の資料の内三種から取られた形である。即ち詳細に年次内容を記す一群、簡単に作者と内容を記す一群、単に作者を記すのみの一群、そして個人の集であつて、その第一を除く三種である。虫麿集のものは比較的成立は早い

他の二種は何れも家持近く成立した資料であるらしく、為に明確な内容を万葉集が失うに到っているのである。かつ、この第二群、簡単な作者・内容の表記をもつ一群からとられたと思われる巻一・三の二首の内、巻一のものは別稿で述べた如く疑問のものであり（既述の如く宇合は神龜二年以後でなければ冬には在京しない）、巻九の三首は藍紙本目録には「飯女歌三首」となっており、宇合作とはなっていない。相聞歌であつて「君」とある（一七三〇）事も、それを助けている

が、紀州本の如く、並記から宇合が落ちたものと思われる。三首の作は確定とはいひ難い。従つて、それら六首を直ちにその作として論ずる事は危険であるが、虫麿集のものは彼に扈從した虫麿によつて伝えられたものであれば、中一首が飯女の作で宇合の歌は二首か、三首とも宇合の作で、虚構になるかの疑点は残るにしても（恐らく前者であらう）、一往宇合の二首は信じてよいであらうし、第二種資料のものは信じられる。第三資料のものも内容的に推し得る。そしてこの六首、何れも右の詩賦の華々しさとは全かけ離れたものであるが、部分的には巻三のもの「昔者」という表記があり、今昔の対比「京引き都び」という新都讃歌の底に文選巻頭を飾る諸都京の賦があつたろう事など、やはり没交渉ではない。巻八のもの

我背子を「何時ぞ。今か。」と待つ

という口調はいかにも和歌的でない。この歌解釈に種々あり「や」を反語とみるか疑問の詠嘆とみるかによつて諸注秋風

の取扱いが違ってくる。つまり「や」を反語とすると、無情に秋風が吹くのであり疑問とすると風の前兆ともなるのである。集中「やは」は「松反りしひてあれやは」（9一七八三）の如く疑問的詠嘆で、「やも」と同一でない。これが家持に「しひてにあれかも」（17四〇二四）と用いられるのもその故である。その上でみると結句は前兆とも徒らな秋風ともなるのだが、宇合の場合孤閨の歌とる方が落着こう。何れととっても無論宮体詩の手法である。

その長官だった難波造宮の歌を除いて、他五首が恋歌である事は長屋王などの傾向と類似する。それには幾つかのケースが考えられるが、宇合の場合には詩賦に全力があり、歌はすさみであつたのだらう。その結果がかかる歌を生んだと思われ、部分的な交渉に止まるのもその故と考えられるのである。

⑭藤原 麿 史の第四子、持統九年生天平九年薨、年四十三才（補任）。一才年長の兄宇合と異つて中央に歴任。養老元年に先立つて美濃介であるが、同五年以降天平三年十一月まで在京、右京大夫・兵部卿・侍從・參議を勤める。三年十一月に山陰道鎮撫使、天平九年に持節大使。終位は從三位である。

作は懷風藻に五詩、万葉集に三歌ある。詩は宴詩・荒墟を過ぐる詩二首・釈尊・吉野詩であるが、一貫して流れているものは老莊思想である。宴詩序で「僕は聖代の狂生のみ」「嵇康は我が友・伯倫は吾が師」といい、詩には「言を寄

す、礼法の士、我が羈疎あるを知るべし」と歌い、吉野のものも「友は于祿の友にあらず實はこれ凌霞の賓」といつている。神納言の墟を過ぎる詩もその免冠を「歸り去つて遂に官を辞す放曠として嵇竹に遊び」という。これらを政治的ポーズであるという歴史学界や、言辞のみで思想的でないとする国文学界やの空気があるが、神納言の墟に立つてその遺烈を慕う時にまで、そのような表現をとる必要はない。その中には「吾帰するとして遂に焉にか如かん」という、自身の態度の表明がある。従つて神納言の行為も、奉諫に中心があるのではなくて、冠を擲つて野に降つた清士隠棲の行為に中心があると考えてよい。磨の詩の基底を流れるものは、実はこの思想であつて、恐らくは現実的にも不遇な点があつたのであろうが、陶潜らにおける理想像が磨の心をより強く支配してゐたと見てよいのである。これは磨のみの好みではない。右にあげた礼法の士に対する言辞など、全くそのまま旅人に連つていくものであつて、旅人のそれよりはもっと鋭く陰惨ではあるが、同様な態度である。神納言のそれも「普天皆帝國」という。これは帝業の讚美と同表現ながら、磨の場合には、繋連の絆たちがたい嘆きとして表現されたものであつて他の人々とはまるで異なる。こうした感情は多大の期待を官界にかけすぎた為に起つたものだったようだ。「天閼もし一たび啓かば將に水魚の歡を得んとす」という一聯がそれを物語っている。

釈尊の一詩は、全く右と反対の立場にあるかに見える。し

かしこれは、釈尊文の形式に当てはめて歌っているであつて、刀利康嗣の作つたその手本とほぼ一致する。それをもつて熱心な儒教の信奉者だつたとはいえないだろう。

なお語句に関しては水野氏が桃李成蹊、伯英のそれぞれ蒙求にある事をいわれ、小島憲之氏は序の「絃歌迭奏 蘭蕙同欣 宇宙荒茫 烟霞蕩而滿目」が

琴歌迭起 俎豆駢羅 煙霞克耳目之觀

(王勃「秋日楚州郝司戸宅に崔使君を餞するの序」)

同声相応 共駐絃歌 同氣相求 自欣蘭蕙

(同「秋映什那西池の宴に九隴の柳明府を餞するの序」)

#### 序

を巧みに借用結合したものとされる。王勃の用語用法の多い事は林氏も認められるところである。初唐詩に及ぶ導入は最新の素養といえよう。

一方、万葉歌は坂上郎女への贈歌三首(四五二—五二四)。坂上郎女との交渉は靈龜元年の穗積皇子薨後、養老五、六年の大嬢(宿奈磨との子)誕生までとすべきであろうからこの歌は、靈龜二年から養老四、五年あたりまでの四年間ぐらいの作となる。第一首「玉匣なる玉櫛の」とあり、その和歌(五二七)が例の「来むといふも来ぬ時あるを……」であり「黒馬の来る夜」(五二五)ともあつて押韻の遊戲性をもつ。第二首「年にあり」といい「年に」が翻訳語たる事小島氏の説かれるところであるが、「よくわたる人が年にある」というのは七夕の物語をさすと思われ、その七夕の擬人化を

介しての相聞である。第三首「蒸衾なごやが下に」というのは、古事記、須勢理毘売命の歌句と等しい。養老初年成書化した古事記から語句を借用したという事はある得ないだろうから、類同の句が恋歌としていくつかの歌謡に用いられていたもので、その一部を相聞歌に応用したのであらう。その点古典的ではあるが、知識の範囲の広さを物語るものといえよう。これらの歌を通しては部分的には異った表現が入りこんで来ているが、これ又五詩の作者としての面目はない。詩に見られたような思想的傾向も、亦ない。やはりここに詩と歌との相違があつたのであり、この相違とは、短歌そのものの性格に大半が起因しているものと思われる。殊に磨の場合には恋歌しか残されていないのであり、宴歌や遊覧歌があれば、もっと事情は異つて来るであらう。それらは作られてもよい筈である。しかし、荒墟の歌や釈尊などの儀礼歌は、おおむね長歌の世界に作られて来たものであつた。それは短歌の発展として用いられたものであつたが、にも拘らず、既に時代はかかる長歌の衰亡に向つてゐる時代である。一半は磨自身の詩歌にかかわる態度の相違もあつたろうが、大半は右のような詩歌そのものの性格の相違であつたと考えられるのである。

⑮ 刀利宣令 刀利宣令は姓のないところから歸化族と思われ、鳥仏師の後かと想像される。史書には養老五年從七位下で侍東宮の列に名を連ねているが、懷風藻では正六位上、目錄に伊予掾とある。没年五十九。この官は位から押すと、養

老五年後であらうし、從七位下から正六位上まで、歸化族の彼が昇任するまでにはかなりの期間が必要だつたらう。多少異なるが、調連淡海は和銅二年從五位下授位、養老七年正五位上授位で、十四年間かかつてゐる、五位と六位とも異なるし、宣令の養老五年は授位ではない点もあるが、これからはば二十年を見ると、没は天平の初頭となる。經國集にある対策は和銅四年のものである。かりに天平十四年を五十九才とすれば、時に二十九才となり、それ程不自然ではない。また、岡田博士はその賀の詩を天平十二年の聖武天皇のものとされてゐるので、そこまで生存が繰下げられれば、天武十一年（書紀紀年）出生、和銅四年三十才、養老五年四十才となり、五十九才の一本五十七才に従えば二才ずつ加わる事となる。賀詩については林氏は反対されてゐるので何ともいえぬが、両面からはば一致する天平十年をわずか降つた頃の没と考へて大過ないであらう。なおその父に擬せられる刀利康嗣は和銅三年從五位下で時に子が二十八才となる。作は懷風藻のものが神龜三年の長王邀宴のもの、歌が宇合の知造難波宮事についてこれも神龜三年、卷八の歌も神龜五年（一四七二左注）以前、賀詩は排列上神龜三年以後となる。

作を見よう。邀宴のものは五言八句で対は一・二、五・六句、その間に平聯を置く発想は珍しいが、二句ずつを一句と見なして出来る十言四句は、実に絶句体の起承転結にかなう発想である。初句「玉燭秋序を調へ」は經國集の対策中にも「四時を玉燭に調へ」とあり、これは対句「万機を金鏡に齊



しうす」をとる。表現が極めて画一的であり、当時の詩文の常道なるものが窺われるのである。杉本氏は秋序の例を、昭明太子の蟬賛からあげられる。右の「金風」の用字は万葉集に見られるものである。この対策文には、他に「有道垂衣に籠る」とあり、万葉語「袖垂れて」が翻譯語である事は別稿で述べた。また「鳴鹿の爵」は極めて普遍的に万葉に流れていた思想で、それが賓主のかかる習慣を含みもって用いられている。弓削・長両皇子の鹿の歌（一八四）も、ほぼ時代を等しくしている歌である。賀詩は広楽の故事、楊雄の著が見え（共に蒙求にある事水野氏指摘）、初六対。語の対としては技巧があり

青春日一白髮年」 百万聖一半千賢」

宅一天」 清素一雲玄」

の如く用いる。○が反対、△が類対、殊に「子雲玄」（楊雄の太玄経）を無視して「雲玄」に「清素」を対比せしめた点は喝采を博したもののなのであろう。

この技巧は、歌にも応用しており、先の「垂衣」「金風」と共に詩歌の交差と見られるが

見吉野之瀧乃白浪雖不知語りし告げば古へ念ほゆ

（三三三）

この一首、詠誦としては実に堂々たる万葉調というべきであらう。ところが、その陰にかくれて種々な技巧がある。

「知らねども」というのは「瀧の白浪」であり、それに集約される吉野である。にも拘らず「瀧のしら浪しらねども」と

いう序詞的な叙法も兼ねて調子のよさを出そうとする。その線でいえば、「語りしつげば」というのは「継ぐ」意であるのに、人が自分に「告ぐ」という意味を含ませようとする。

これは漢語の形象性の応用に他ならない。この「継ぐ」意の用字「告」は次の赤人のもの（三三一七）が単独に用いられた作者判明歌の唯一例である。更に、自分は吉野を「知らない」のである。まだ見ていないのである。「見吉野」の用字には「見吉き吉野」という気持があるのではないか。この用例は集中大行天皇（一七四）旅人（三三一五）釈通観（三三三）赤人（三九二六）と五例のみで、これ又偏在している。人麿の「み心を吉野の国と」（一三六）も同じ技巧である。かかる点に一つの詩歌のひそかな握手を考えてよいであろう。なおこの一首は吉野讃歌を基としており、その公的性質を指摘出来る。巻八の一首（八一四七〇）は夏雑歌中に霍公鳥の一群としてあげられたものの中で、明らかに題詠と見られる。巻八の夏雑歌の三十三首は、その題詞を

A 某歌一首（例、藤原夫人歌一首）

と記すものと

B 某の甲の歌一首（例、小治田広瀬王霍公鳥歌一首）

と記すものとこの兩種に分かれる。それによって区分するとこのABは

A

B

一四六五——一四六七

一四六八・一四六九

一四七〇——一四七三

一四七六

一四八〇——一四八四

(一四九七) (一三首)

の如く、全く整然と交互に現われ、最後に虫麿集のものを一首加えている。そして、このA・Bそれぞれをつづけると

A

藤原夫人

志貴皇子

弓削皇子

刀利宣令

山部赤人

石上堅魚

大伴旅人

小治田広耳

大伴書持

大伴清繩

庵 諸立

坂上郎女

B

小治田広瀬王

沙弥

坂上郎女(二回)

大伴家持(九回)

遊行女婦

大伴村上

大伴家持(二回)

C

高橋虫麿歌集

一四七四・一四七五

一四七七——一四七九

一四八五——一四九六

(一九首)

歌一首、遊行女婦」とあり、例外とすべきで、恐らく次の村上の歌と共に家持の歌の縁によって並べられたものと思われる) 以外、作者の配列は些かも乱れない。そしてAB両群には作者の同出があるが、同一群の中には全くない。

この事は、原資料が二つあって、それを組合せた事を示すものであり、この傾向は巻八全巻に亘ってほぼ認められるところであるが、余り多岐に亘る為に別稿に詳述を譲ろう。すると、Aの一群の総題はいう迄もなく「詠霍公鳥歌」とでもあったに違いない。それに対してBは霍公鳥を主とし、それに橘四種・蟬・唐糠花・石竹花各一種という部類で、文字通り雑々の歌を集めたものである。そして、Aの資料の特色は家持を含まぬ事である。つまり家持のものはすべてBに廻っているものであり、家持に先立つ成立の一書から、恐らく家持がこの部を編み出した事を意味する。Aの最終作者は坂上郎女である。推測して言えば資料Aは、或いは坂上郎女によって集められた霍公鳥の歌ではなかったろうか。

こうして坂上郎女によって編まれた資料Aには、

霍公鳥いたくな鳴きそなが声を五月の玉にあへ貫くまでに  
(一四六五) 藤原夫人

神奈備の石瀬の杜の霍公鳥ならしの岡にいつか来鳴かむ  
(一四六六) 志貴皇子

霍公鳥なかる国にも行きてしか其の鳴く声を聞けば苦し  
(一四六七) 弓削皇子

もののふの石瀬の杜の霍公鳥今も鳴かぬか山の常陰に

の如く、遊行女婦のところで乱れる(因みにその題詞は「橘

(一四七〇) 刀利宣令の如く固まっていた筈であり、別稿で述べたように、同巻春雑歌には

神奈備の石瀬の杜の喚子鳥いたくな鳴きそわが恋ひまさる  
(二四一九) 鏡王女

が親戚関係にある。つまり上半句は全く流行的口調を真似ているのであり、下半の二句にのみ宣令の表現があったと考えねばならない歌である。霍公鳥を題詠として類似句をかりながら詠んだ詠物歌が、宣令のこの一首なのである。霍公鳥はここでも橘・藤と組合せられており伝説をもった鳥である。調和の美という事も大きな情趣上の進展であるし、素材的にも宣令の熟知していたものであった。

⑩石上乙磨 乙磨は左大臣石上磨の第三子、従三位中納言で勝宝二年九月薨じた。薨年は記されようとして記されていないが、史書初見は神龜元年二月の従五位下、時に正六位下と見えるが、従五位上昇任が天平四年で八年かかっている事を仮りに手がかりとすれば、正六位下は靈龜二年となる。左大臣の子としてその授位は遅くないだろうから年をこの時十六才とすると、出生は大寶三年となる。久米若売事件は天平十一年(万葉では十年)で、時に年三十九才になる。既に丹波守在任の頃であるから、不自然ではないだろう。右の計算に従うと薨年は五十才となる。大凡の見当として認めておきたい。歴任は丹波・常陸・西海道巡察使と地方官が多く、中央では治部卿・右大弁・中務卿を歴ている。万葉では筑前国

司任を記す(336八左注)が、史書にはない。右の経歴からは、取立てていう事ないが、懷風藻の伝には天平年中の遣唐使任(「遂に往かず」)を記し、「衆、僉な悦んで服す」とあり、人となりとしては「志を典墳に勵むと雖ども、亦頗る篇翰を愛す」とある。「其の人を得難」い大使に選ばれた事はその文学力として注意されよう。

作は懷風藻に四詩、万葉集に最大七首(不確定)ある。この内詩は全篇土佐配流のもの、歌も四首がそれで事件の伝承的に大きかった事を物語っている。久米若売は宇合の室であり、百川の母であるから、天平十一年はその夫の死の翌年・翌々年である。顯官の室である事と、死の直後である事があげられる。この時久米若売も下総国に配流となる。古く木梨輕太子の場合も、近く中臣宅守の場合も配流は男のみであるのに(大娘を配流する書紀には「太子は是れ儲の君なり、罪することを得ずとて」と明記してある。)この場合には共々配流されている。また、「奸」けた事が罪を得るという事は、若売が宮中にあった事を意味していよう。女官であった。そして更に乙磨は左大臣家の息であり「地望清華、人材穎秀、雍容閑雅、甚だ風儀に善」かった。こうした五つの条件が重なってこの事件が大きな伝承となったといえよう。別のいい方をすれば、事実に関与する文学の関与の仕方は、悲劇が深刻であればある程強いという事であろう。

その集衡悲藻が四首の資料であろうが、この書名の出典として岡田博士は、沈約「友人を送別す」の「君東し我も亦西

す銜。悲涕霰の如し」と、楊素「薛播州に贈る」の「銜悲南浦に向へば寒色黯うして沈沈たり」をあげられた。乙麿の第一首は屈原に見立てたところが多い。その点からいえば楊素のものに近いと思われるが、しかし「余は南裔の怨を含み君は北征の詩を詠ず」という表現は沈約と等しい。何れとも断定は出来ないだろう。

在京故友に贈る詩には「徒らに弄す白雲の琴」と見える。これは田村氏「相思ふ明月の夜迢遞たり白雲の天」（楊炯「有所思」）をとったと考えられる。白雲は房前の書簡・吉田宜の文にも見えるが、和麿にもこの楊炯のものと似た「青海千里の外白雲一に相思ふ」があり、中国のものには他に「白雲天に在り山川之を間つ」（江醴陵「黜せられて呉の与令と爲り建平王を辞する賤」）、「白雲を度りて以て方に潔く青雲を干して直ちに上る」（孔德璋「北山移文」）等あげられ、後者吉田宜の文に影響を与えるものである。歌では宜の「白雲の千重にへだてる」（586六）赤人の「白雲も千重になり来ぬ」（694二）等、あの馬養が「方に唱ふ白雲の篇」といい「常世辺に雲立ち渡る」と浦島の「言持ち渡」つたその白雲の気持と同じである。それが乙麿にあっては詩歌両様に用いられるのであって「石上卿」を乙麿と考えれば（古義）、その作（327八）には「此処にして家やもいづく白雲のたなびく山を越えて来にけり」と歌われるのである。第二詩據公入京に贈った詩も、前期懷風藻を彩っていた故事の羅列からは脱している。田村氏「相望んで天垂に別る、分

れて後長く違ふことなかれ」に「今日榮しく相樂しむ別後相忘るるなかれ」（魏、曹植「怨詩行」）をあげられる。「天垂」など、和語化したものを加えて持つところに一つの意義を見る。第三詩、旧識に贈る一首は林氏が「玉台新詠に入るべきもの」といわれたのが簡要を得た卓説であろう。林氏が直観されたものを田村氏は具体的にあげられる結果となっている。「万里風塵別れ 三冬蘭蕙衰ふ」に「雄心四海に志し 万里風塵に望む」（晋傳元「予章行、苦相篇」）「衿を開いて期知らず 恨みを吞んで独り傷悲す」に「人を憶うて語るに忍びず 恨みを含んで独り声を吞む」（梁簡文帝「擬古」）をあげる。何れも玉台の詩である。この玉台風という事は次の秋夜閨情一首において最も著しいであろう。玉台の世界が情詩のそれである事も、それが万葉の恋歌と根本的に相違する事も幾度か触れた。閨怨詩もその中であって育ち、上代人に与えられたものというべきであるが、この一首は閨怨詩であってその題材を興によって作っているところが見られるのである。その作たる万葉歌には三首の長歌がある。（610一九—10二三）。この三首の作者は諸説あるわけであるが、誰であるにせよ、この一連は同一人の手になるものと考えねばならない。別人の作ならその由の左注が一つあるのを原則とする。また「三首并短歌」という題詞は異常であり、三首に対して一首の反歌という事になる。これは事実はどうではなくて、一連三首が実は一首の長歌だから反歌が一首しかないのであり、別人の由の左注もないのである。一連

を三段に分つて同一人が作っている。第一段が時人の立場で、第二段が妻の立場で、第三段が乙磨の立場で。これ又別述した事だが、元来わが国には相聞の長歌というのは異例なのである。それが情詩の導入によって出来ているとすれば、

この場合もこの複式構成は中国詩に倣つた、情詩の体をとるものなのである。この「同一人」といつているものが乙磨自身であつたかどうかは定め難い。しかしそれは万葉の作者の大前提であつて、この三首を一往乙磨として伝誦していたのであらう。そこに乙磨における情詩意識がある。これは正しく玉台の世界に他ならないのである。詩の中には「展転」という語がある。元来は詩経語たる事無論だが、万葉にも「反側び恋ひかも居らむ」（虫磨 9 一七八〇）という用例が右の直後に見える。この場合は大伴卿に別れる場合だし、虫磨は浦島（9 一七四〇）にも用いていて、これ亦恋にはかわらない。それに対して、この乙磨の詩は一層正確に恋情に用いているのであつて、これ又万葉と接近しながら閨情表現たるを失わない。また「寝裏、歛、実の如く、驚前恨み泣くこと空し」という表現は、遊仙窟の「驚き覺めて之を攬れば、忽然として手を空しうす」と同類で、契沖以来万人のあげる家持の「夢の逢は苦しかりけり覺きてかき探れども手にも触れねば」（4 七四一）とも等しい事になる。この歌につづく「二重のみ妹が結ばむ帯をすら三重結ぶべくわが身はなりぬ」（4 七四二）や、卷十三の「楮垣の久しき時ゆ恋すればわが帯ゆるぶ朝夕ごとに」（三二六二）も代匠記以来遊仙窟の影響

響とされて来たが、遊仙窟にもある他、玉台新詠にも「衣帯日に已に緩なり」（卷二、枚乗「雜詩」〔曰行行重行行〕）とある。すべて、これらは玉台の世界なのである。

「玉台の世界」という事は、換言すれば遊興的情詩の世界という事である。その意味で、これは遊仙窟の世界といつても変らない。乙磨が、こうした家持の青春期の文学と文学的趣向を共にするという事は、そこに一つの当時の文学享受の世界を認め得る事になる。久米若亮事件も、その一端として伝承されたであらうし、南荒の乙磨の悲歌も、卷九の複式長歌もその世界の中で生れ、かつ生きたものだったのである。

万葉百余年の歴史を経て、この期にかかる詩歌の一体性が認めうるといふ事は故なしとしない。右の歌につづく田村大嬢の歌には「白雲の棚引く山を」（4 七五八）とある。これ又先の如く乙磨と共通する世界であつて、乙磨・家持の遊仙窟的・玉台の世界の一環と考えるのである。なお田村氏「客心驚く夜の魂言は故人と同じ」を秋夜閨情「他郷頻りに夜夢む談は麗人と同じ」にあげられる。

乙磨の歌は他には、卷三の短歌一首（三 七四）は蓋の諧謔によるもの、石上大夫の歌（3 三六八）も筑前国司任を史に記さないのも不明であるが、右の如き作家として乙磨をとらえると「大船に……大王の」「かしこみいそみ」という技巧は意識上にあつたかとも思われる。更に一首先にあげた卷三のもの（二 八七）は志賀行幸を養老元年のものとする、先の推定では十七才にしかない。生年を繰上げるべきか、

養老元年をすてるべきか、また乙麿をすてるべきか、三者何れをとるべきかは遽かに判断出来ない。恐らくは、乙麿の元来の作は、卷三・三七四番の一首であろう。他の二首の短歌は伝承付托によるもの、長歌一連は時人の作という事になるかと思う。乙麿の実作を右の一首とする事が作の内容を他の作詩歌人に比べてみた場合に、極めてよく落着くようである。

⑩大伴池主 大伴池主の伝は全く知れない。万葉によると天平十年十月の歌が最も古いもの、勝宝六年正月四日の歌が最も新しいものであり、続紀には宝字元年七月四日に名が見える。その間十九年間であるが、最初の歌(八一五九〇)が奈良麿の集宴のもの、最後の記事が奈良麿の謀反連座の記事で、奈良麿に始まり奈良麿に終るその十九年間が知り得る池主の生涯である。第二に古いと思われるものが天平十八年八月七日の越中国司家持の館の宴のもの、この時越中掾である。天平二十一年(二十年の説もある)三月十五日(18四〇七三・四〇七五)には越前掾として見え、勝宝六年正月四日の歌(20四三〇〇)には左京少進とある。すべて家持の縁によって万葉に詩歌をとどめた作家であり、その故に他の閥歴は否として知れない事となった。この関係は池主の歌を見る場合の一つの条件となるもので、必ず家持が介在するものしか作が残されていないという事は、池主の本質をかなり偏向して示しているという事であって、軽薄であるとか、相手の心を迎える作だとかを池主の作家的特色とする事は出来ない

のである。

その作は長歌四首、長歌に伴う短歌七首、短歌十八首(「古人云ふ」を含む)詩一首。内序を伴うものは長歌の序一、短歌のそれ一、詩のそれ一。また上記短歌を含む書簡文三である。ここで序というものは、天平十九年三月二日から五日までに往復したもの(17三九六七・三九七五)の内、池主のもの、書簡文というものは天平二十一年三月十五日(18四〇七三・四〇七五)・勝宝元年十一月十二日・十五日(18四一・二八一四・一三三)の三種をいう。それぞれ序と書簡との呼称が諸注・諸論文区々なので、明記しておきたい。

右について考え得る事の一つに、池主は一首も進んで長歌を作っていないという事があげられる。長歌四首は、天平十九年の三月五日、四月二十六日、二十八日、五月二日とわずか三カ月間に塊っており、その第一(17三九七三・三九七五)は、例の「山柿の門」を云々する家持の長歌に対して詩を送り、翌日更に送ったもの、第二(17三九九三・三九九五)は家持の布勢遊覧の長歌に対して和したもの、第三(17四〇〇三・四〇〇五)は家持の立山の長歌に和したもの、第四(17四〇〇八・四〇一〇)は家持の入京述懐の長歌を見て作ったもので、すべて家持の長歌に対して長歌を返すという形でよまれているのである。別述の如く、私は長歌はこの頃衰退し家持の個人的興味がそれを支えていると考えている。池主はその家持に引かずられているのに過ぎないのであって、池主の本質は時代の動きと軌を一にして短歌にあったという事が

いえるのである。

のみならず、右にもあげたように、その詩一首（17三九七二と三九七三の間）は、家持の長歌に対して池主が自ら進んで選択したジャンルであった。家持の返事はこの時、詩歌両方になされており、『昨暮』詩を得『今朝』累信を辱く」しと記している。そして家持はこの池主の詩に対して自らも詩を作るといふ形をとる。即ち、池主は進んで長歌を作ろうとしなかったのみならず、進んでは詩を作っているのである。短歌と詩とが池主の中心であった。既に幾度か描きつづけて来た私の万葉の歴史と、右のことは符合するのであつて、時代は既に短歌と詩の時代に入っているのである。池主の作はすべて家持への返事ばかりではない。進んで歌を送っているものもあつて、その二種、第一（18四〇七三―四〇七五）は三体に分けた一首ずつ、第二（18四一八―四一三一・四一三二・四一三三）は贈られたものに托した戯歌二回で、何れも短歌である。天平二十一年三月十五日のものと、勝宝元年十一月十二日・十五日のものとする。

また池主は、家持によつてのみ万葉歌人となつたのであつたが、その家持との関係は、在京時を除くと、天平十八年八月七日に家持の館に宴集した時、一回きりが直接の接触で、他は悉く書簡による交友である。この宴の顔ぶれは守家持、掾池主、大目八千島、史生道良、僧玄勝の五人で、介はいないが、七月任命のことでもあり、新国司着任の邀宴であつたろう。その新任の時の挨拶のみで他は約二年間は共に国庁に

あつた筈なのに直接の邂逅がない。この特殊性が池主の歌の一つの特性を形成している事は、重大に考えなければならぬのである。即ち書簡としての特殊性を付与されていたのであつて、宴集の池主の作にはさしたる媚はない。それに対して書簡文をもつ贈歌、和歌の類にはただならぬ家持への媚がある。これは池主の本質というよりは、作が偏向して残されたといふ事なのであつて、書簡の多くは文選に見ても、挨拶・儀礼の部分を濃厚に持つていたのである。また、六度の贈答の内、序乃至書簡をもたない布勢遊覧と立山賦との和歌を除くと、第一回（天平十九年三月二日―五日）は家持の病気を知らせる書簡への返事であり、第四回（天平十九年五月二日）は家持の「悲情撥ひがたく懷を述」べたものへの返事であり、残る二回のみが池主から積極的に送つた歌となる。<sup>(26)</sup>そしてこの内一回は戯歌（勝宝元年十一月十二日・十五日）で、結局、一回（天平二十一年三月十五日）だけが悲しみの贈歌となる。つまりこの一回のみにおいて池主は家持なみの憂愁を表現しているのであつて、他は悉く悲しみの贈書への返事であれば、それを称揚し、激励する他はないものである。池主のおかれた立場を、このように規制する条件を外して、池主の本質はとらえ得ない。無論自らの家持への贈書も恋情深い感傷のものである。かかる性格を池主がもつていなかったとはいえないが、多くは家持に規制されたものである事を確めておかねばならないのである。自らの自由な立場のものでは、戯歌と、三条分類の悲傷の書をもつものと、数量

的にいえば同等である。のみならず進んで詩を贈っている。この三者が対等に絡み合うところに、作家池主がいたと考える。

池主の作のジャンルについて、およそ右のような事が考えられるのだが、次にその内容について考えてみよう。第一にその短歌・詩・長歌を含む贈答（17三九六七―三九七五）は岡田博士が劉琨・盧諶の贈答詩に擬したものだという説を出され、小島憲之氏の反対や古沢未知男氏の賛成があった。この一連は、贈答の形はそれに似、語句としては初唐詩にも似ている。従ってこの形を連想するのは、当時の文人として当然であろうし、その実作に当って筐底にある詩句があれこれと脳裏に浮ぶのも亦当然であろう。形を連想したとする岡田博士の説も、直接の原典典拠となつたのではないとする小島氏の説も、池主全体が文選の蒙りを濃厚にもつとする古沢氏の説も、それぞれに正しいものであるが、その何れかを一つ強く主張すると間違ひになる。小島氏が反論を踏まえて贈答をまね、語句は文選を中心とする六朝ものに初唐ものをも加えたところに中心があるとされたのに全面的に従うべきであろう。その語句を小島氏や諸注によって見ると、「翰苑雲を凌ぎ」「以は吟じ以は詠ず」「春樂しむべし……樂しむべきかな」「紅桃灼灼として」「戲蝶」「翠柳依依として」「嬌鶯」「淡交」「席を促して」「言を忘る」「幽襟」「蘭蕙」「琴罇」「物色」（三九六七の前）「寂を叩き」「章を含まずは」「袂服を縛にし」「桃源」「仙舟」「雲疊」「羽爵」

（三九七二の後）「死罪々々」「英靈」「智水仁山」「既に……自り」「詩書」「廊廟」「琳瑯の光彩を韞み」「潘江陸海」「思を非常に聘せ情を有理に託す」「七步章を成し」「彫竜」「筆海」（三九七三の前）など、何れも詩経・莊子（礼記）六朝詩・文選・詩品・初唐詩・遊仙窟・懷風藻の語たる事は明瞭である。就中、懷風藻とその語の共通するものが多い事は注意され、小島氏もあげられているように「物色人を軽くす」は王勃の「林泉独飲」に「相逢ひて今醉はずんば、物色自<sub>レ</sub>輕<sub>シ</sub>人<sub>ヲ</sub>」とあるのみならず、民黒人が「此の時能く賦なからば風月自<sub>レ</sub>輕<sub>シ</sub>余<sub>ヲ</sub>」とよむものである。この点池主が特殊な作家ではなく、当時の常識的な文化圏の一人として漢籍の教養の内では普遍的になっている知識に基いて書いているのである。こうなれば、もはや何を粉本として書いたというものではないのである。懷風藻と一致する語句をもつという事は、かかる意味を示す点、注意せねばならない。しかしこれ以上曰の詩である。そこにも曲宴の習慣を通して懷風藻に連るものをもつのであるが、しかしこれは七言八句の七律の体をもつものである。対句、韻においても完全であり、平仄が整えば確実な唐律であろう。池主の文雅は余りにも家持によって過少評価されすぎてはいないであろうか。序は詩に付せられたものは「四韻を勸す」という。この場合の「韻」は二句を指しているのであるが、これはたとえば簡文「和湘東王三韻」（六句）「戲作謝惠連体十三韻」（二十六句）「倡婦怨情十二韻」（二十四句）などの用法と



等しい正格のものであって、かの造物所作物帳紙面の七夕詩に「各成二韻」(十二句。二首の意)とあるなどといういい加減な用法ではないのである。この序の形式自体も、詩序の形式を踏んだものである。右の諸点は次の贈答においても等しいのであって、勝宝元年のものには「風雲」「身胡馬に異なれども心北風に悲しむ」「月に乗じて徘徊し」「使君」といった言葉や故事を見るのである。しかし、ここには「面蔭」という語もある。これは日本語であらう。一つの和臭である。

その長歌についていえる事は、叙述の途中において文の切れる事の多い点である。

藤浪は咲きて散りにき。卯の花は今ぞ盛りと(三九九三)のごとく冒頭二句をもって切れる長歌は類型がない。この部分は一種の引用句の如き形をとり、次の「鳴きし響めば」にかかるので、その中で切れるのであるが、すると「今ぞ盛り」でも切れる事になるのである。

君待つとうら恋ひすなり。心ぐし。いざ見に行かな。事はたなゆひ。(三九七三)

結句、三句が切れる。その長歌では他にも

下念よ嘆かふわが夫。古ゆ言ひ継ぎ来らし。世の中は数なきものぞ。

と三つ終止句がつづく。こうした事は人麿挽歌などには思ひもよらなかつた事であり、高市皇子挽歌では百三十六句が連綿として続くのである。また切れるものは大凡対句表現をと

つて歌中に挿入された形の部分である。ところが池主の四長歌では、こうした連綿とした語句のつづきが無い。最も長く続くものが二十六句である。これは口唱的口調を欠くという事でもあるが、試みに池主の長歌の終止までを群と考え、その群がどう続くかを考えてみると二句を二と数えて

三九七三 4 2 3 1 4 5 1 1 八群(二十一句)

三九九三 1 10 13 4 1 五群(五十七句)

四〇〇三 4 5 1 8 1 五群(三十七句)

四〇〇八 9 1 4 9 四群(四十五句)

の如き句数によって群に切れる。即ち全篇一体の雄大な抒情という事は、もはや右にはないのであって、全体を適当に裁断して、それぞれの群を並列する事によって全篇の効果を狙おうとするものである。こうした長歌の構成法は、その莊重な響きや叙事的内容の故に歌われた長歌の構成法とは異質であつて、句句を連ね、断絶と連続とによりながら全体を構成しようとした、詩の構成法と等しいものというべきであらう。先に掲げて来た池主の作家としての態度は、かかる長歌の構成法にも現われているのである。

この流麗な詠嘆調の崩壊という事は、短歌についてもいえる。池主の短歌二十五首について、その切れ方を見ると全一首一終止のものを一群と考えると

一群(池主)	10	(赤人)	25	(黒人)	9	(日並皇子)	18
二群	14		11		9	(宮舎人)	3
三群	1		1		2		

の如くなる。全一首が一流れの流麗さを示すものは舎人らのものを第一とする。赤人はその傾向をうけつぐが、舎人らの慟哭には及ばない。しかし黒人はこの赤人の傾向とは逆に、もつと断続的に呖々である。それらに対して二群が一群を越えるのは池主であつて、そこに池主の特色があると考ええる事は許されるであらう。この特色は、右にのべた事と異質ではないと考えるのであつて、一流れの詠嘆というよりは幾群かの何段かの抒情要素の連続によつて一首を構成しようとするものといふべきである。右の池主の一群の短歌でも、何らかの意味で準終止的な面が窺われる。たとえば「十月時雨に逢へる……」（一五九〇）の如く、初・二句間には助詞がなかったり、「行きめぐり、君を思ひで、徘徊り来ぬ」（一七三九四四）の如く連用形を連続せしめたり、「天さかる鄙にある我をうたかたも紐解き放けて思はすらめや」の如く、途中の連用修飾は必ず二句飛びこして次にかつたりしている。そこに自らの休止が生じて来る事は当然であらう。かかる質の変化を齎しているものは、これ又従来の文学とは異つた一面では新しい手法であつて、詩の手法と型を同じくするものである。右の体言のみで助詞を伴わない語法は無論池主のものではないが、池主に多く目につくのも事実である。「射水河水門の洲鳥」（三九九三）「沖つ波寄せ来る玉藻」（同）。また、いわゆる「く」語法と呼ばれるものを長歌に用いる点もある。「里人の吾に告ぐらく」（三九七五）「我が乞ひ祈まく」（四〇〇八）、これらも純粹な終止ではないが、

流麗さを切断するものといえよう。語の羅列、孤立語的その構成は、当時の文化や作者の教養とは無縁でないだろう。次にその用語についてみると、地主の作にはかなり特殊な語がある。「うたかたも」（三九四九・三九六八）「たなゆひ」（三九七三）「脚帶手装り」（四〇〇八）これらは後二者書記に用いられる語であつて、例の家持圈の古語意識と呼んでいいものであらうが、かかる古語意識はつまりは文人意識であつて庶民的なそれではない。習慣的な歌語に対して特殊な語を用いて新奇をてらおうとするものである。とするとその意識は当然逆に俗語・漢語を用いようという意識にもなる。そして、その最も多く用いられた場合が戯歌であつた。「おのともおのや」（四一二九）「てらさひ」（四一三〇）「ふさへしに」（四一三一）「たたさにもかにもよこさも」「奴」「主」「殿戸」（以上四一三二）「すり袋」（四一三三）などである。この中「奴」「主」「殿戸」はその書簡中の「正職倍職」が既に説かれていのように律令用語である如く、文書の言葉を用いたものであるが、それを手がかりとしていえば、俗語を用いたてらいがあるといえる。これは唯一、これが戯歌だから起つたという事ではない。先にも行文について考えたように、それら伝統的和歌にのみ終始しない人々の傾向として、かかる傾向が見られるのであつて、これをこそ一つの文雅としてもてはやした痕跡があるのである。かの巻十六の成立は、そうした末期万葉の文学的空氣によつてゐる。漢籍語そのものも伝統的に大学寮で規定してゐるも

のとは別に、新来のものをを用いようとする傾向もある。そして万葉が宮廷文学の世界から脱しえないものだったという宿命もある。もろもろのかかる要素の中に戯笑歌が作られ、刹那的技巧が喜ばれたのである。その一つとして右の如き用語を理解すべきであろう。単なる戯歌の故に用いられたというよりも、むしろかかる用語を生む意識が戯歌を生んだのである。

従って、かかる用語を顕在せしめずとも、池主は戯歌を作っている。

天さかる鄙にある我をうたかたも紐解き放けて思はずらめや  
(三九四九)

高円の尾花吹き越す秋風に紐解き開けな直ならずとも

(四二九五)

何れも宴集の歌であるが、前者、一連おみなえしを詠み、妹を詠む。この両者を結合させて「紐解き放けて」を解釈しなければ正鵠は得難い。その点諸注の中で私注の説は当たっているだろう。遊女になり代って「私など思ってくれないだろう」と詠んだのである。それによって次の家持の歌が難なく受けつがれる事はいふ迄もない。更につづけて八千鳥は「そんな事をいっていないで」という気持を述べるのである。「をみなへし」はかかる遊行女婦である。とすると家持の第一首(三九四三)は池主に対する揶揄であり、池主は次いで(三九四四)「いや、私はふさたおりません、たともはっただけです」というものである。だからこそ次の「妹が

衣手著むよしもがも」(三九四五)が生れるのである。その後は寒さが主題になって池主と家持の二首があり、再び家持の「私は紐をとかない」という歌に戻る事によって先の池主の三九四九番となるのである。

後者も「紐解き開け」という恋にしか用いられない語を用いている。「直ならずとも」は「徒ならず」ではなく、やはり「直々<sup>じきじき</sup>ではなくとも」の意であろう。秋風は「直」ではない。しかし「尾花を吹きこす風」である。そこに一つの諸諺があつてこそ宴集歌たり得ているのである。この風の取扱いは、先のものにもある。

ほととぎす鳴きて過ぎにし岡傍から秋風吹きぬよしもある  
らなくに  
(三九四六)

ほととぎすが鳴き去った事は夏の終りを意味する。その岡びから交替して秋が来たというのである。古今集の「夏と秋とゆきかふ空」(巻三夏)というのと同型の着想である。

かかるさりげない表情の中に技巧を凝らすところに池主の立場があつたといえる。一つには宴集歌である性格上の制約をもつ事は先述した如くであるが、かかる技巧を弄する事に関心をもち、弄し得た点は認めうるのである。そして歌のかかる姿への陥没こそ、漢文学という新興文学の中に残喘を保ちつつあつた和歌の宿命だったといえるだろう。池主個人の場合をとって見ても、詩的構成をもつ長歌や、七律の中に晴れの文学がある。言葉の機智的な技巧が弄し得る点は、知らず知らずの中に歌人たちに大きく利用されていった事だろ

う。繰返して説くように、その上に個性が加わらぬ文学はあり得ない。池主は右の歌の陥没と相伴う個性の持主だったのである。

なお、語句としては「相思はず」(四〇七五)の如き「相」「日に日に……しくしく」(三九七五)の如き疊語も、漢語表現と考えてよいであろう。

⑱ 石川年足 続紀によれば宝字六年九月、七十五才で薨去。逆算すると持続二年の出生となる。左大弁石川石足の子である。天平七年四月從五位下授位が続紀初見で、出雲守・東海道巡察使・陸奥守・大宰帥らの地方官歴任の他、少判事より春官員外亮・左中弁・参議・春宮大夫・式部卿(文部卿)・紫微大弼・迎神使・神祇伯・兵部卿・中納言・御史大夫という中央官としての活躍を見せる。終位正三位。地方官としては天平十一年六月善政の賞賜を受け、中央官としては式部卿という歴代文雅の士の職を経、勝宝八歳十二月には梵網經講説の使者に立ち、迎神使・神祇伯という職も看過できないだろう。式部卿によって現わされる儒学的教養の他に、神祇への教養も有していた事を示している。法政の面への造詣も深かったらしく、宝字三年六月には別式二十巻を撰定した由が見え、「各々其の政を以て本司に繋ぐ。未だ施行せずと雖も頗る捭用あり」といわれていて、實際面になつたものであつたのであろう。善政賞賜と同範圍に考え得る事柄である。また右の梵網經講説使は、単なる職務とも思えない節があり、古京遺文に収める高山寺蔵の「石川年足朝臣弥

勒上生經跋書」がある。願文であるが、それが当時かなり弥漫していた習慣ではあつたにせよ、仏道への信仰も認める事が出来る。儒仏そして神祇の三面に心を致していた政治家だつたといえよう。続紀の伝(宝字六年九月)には「率性廉勤にして治体に習ひ」といい「公務の閑には唯だ書のみ是れ悦ぶ」といつていて、温雅な読書に耽る政治家を想像させている。墓志には「儀形百代にして冠蓋千年なり」と称えている。

その作となるべきものは、文学作品としては、万葉集に一首(19四二七九)のみだが、先述の弥勒上生經の跋書が漢文として残されている。願文はその天平十年六月二十九日の日付があり、出雲守当時、五十一才のものである。その性格上仏法讚美と自分の祈願を述べるものにすぎないが

蓮台の宝相は 璧月を含んで光を被り

貝象の宝文は 珠星を貫いて影を流す

伏して願はくは

能仁に契道し 正覚に昇遊し

菩提樹の下に 妙法の円音を聞き

兜率天の中に 上真の勝業を得……

の如き、典型的な四六駢麗文である。数年先立つ憶良の仏法にふれたものと読み比べて見ても、遙かに整つていて、美しい。同じ願文の類でも、類同の個所を拾ってみると

○光明皇后一切經跋書(天平十二年五月一日)

伏して願はくは

斯の勝因を憑み 冥助を奉資し

永く菩提の樹を庇ひ 長へに般若の津に遊ばむことを：

○教仁等大般若經跋書（神護景雲元年九月五日）

仰ぎて願はくは 挂まくも畏き聖朝

金輪の化乾坤と動くこと无く

長遠の寿 劫石と弥々遠く

退いて願はくは

篤蒙の四恩 卅卅の山に枕し 菩提の樹に坐し

位を灌頂に成し 力を降魔に奮む 広を法界に及ぼす

の如くである。景雲元年のものは和文化的な所も見せ、内容もやや遠いが、これらに比べてみても年足の願文が文学的である事はいい得るであろう。年足の詩は残されていないが、もしあれば淡海三船の如き仏法帰依の中にありながら文雅に遊ぶという体のものであったろう。憶良のものは願文ではない為でもあるが、もつと自己の苦悩に執し、もつと仏法そのものの分析に走り、そしてもつと故事の羅列に終始しすぎている。これが年足の作ともいふべきものを認める所以である。

万葉歌は勝宝四年十一月二十五日の新嘗会肆宴の応詔歌六首中に見られるもの。年足六十五才である。その応詔歌人は巨勢奈氏・文室智努・藤原八束・藤原永手そして家持。

天にはも五百つ綱延ふ万代に国知らさむと五百つ綱延ふという年足の一首は下注「古歌に似て未だ詳かならず」とあるように古風なものである。この古風さは、祝歌的発想に基

づく感じであって、神祇伯たる年足を想起せしめる。先に述べた如き儒・仏・神何れにも造詣の深かった年足の神祇的一面がここに現われていると見るべきものであろう。この思想とて人麿について詳述しような東洋思想ではあるが、年足の場合にはもはや伝統的な思想として継承していたものであったろう。年足が何らそれに抵抗を感じずる事なく、一首の歌として仕立て得たのは、漢詩賦の頌歌とて天に万国を万代に支配する天子の讃仰が普通だったからであらう。年足の場合の彼我文学の交渉は、それ程深くはない。ただ双方にそれぞれの美しい造型を果しているのである。先に見た生涯の考察はそれを十分納得させるものであった。

⑭石上宅嗣 宅嗣は左大臣麿の孫（統紀天応元年六月）乙麿の子（同上、補任）、天平元年出生（補任神護二年条に神龜五年とあるのは薨年に合わない）、天応元年六月五十三才で薨じている。その生涯中、宝字元年の相模守を初見として治部少輔・紫微少弼・参河守・上総守・文部大輔・侍従・大宰少貳・常陸守・中衛中将・参議・左大弁・式部卿・大宰帥・中納言・中務卿・大納言を歴任、宝字五年八月には遣唐副使（遂に相代つて留る）に選ばれてもいる。位は勝宝三年正月正六位上を初見として正三位に累進、更に賜姓の事が統紀に見えている。薨後贈正二位。

薨後の伝によつてその人となりが見えられ、性朗悟にして姿儀あり、経史を愛尚して涉覽する所多し。好く文を属して草隸を工にす。

辞容閑雅にして時に名あり。風景山水に値ふ毎に、時に筆を把つて之に題す。宝宇より後宅嗣と淡海真人三船を文人の首と為す。著す所の詩賦数十首あり。世に多く之を伝誦す。

とあり、その文雅の並々でなかつた事、殊に「文人の首と為す」という事は既に朝堂に文雅の享受が行なわれていた事を意味し、漢字文学の日常的弥漫を示すのだが、その中で「文人」がもはや存在し、その首となつていた事を示すのである。「文人」の具体的な姿が風景山水に値う毎に筆を把つて題するという事なのである。この記事について例の芸亭の事を記す記事は大切である。

其の旧宅を捨てて以つて阿閑寺と為し、寺内の一隅に特に外典の院を置き、名づけて芸亭と曰ふ

「外典」と記す事は後述の意味で問題となるが、自宅を寺とし外典を置くという事が右の「文人」の理想であつた事を認めねばならない。この私設図書館には「条式」があつた。「其の略」ではあるが、宅嗣の文章であり、その思想を見る上に作品に準ずる価値をもとう。

内外の両門、本、一体たり、漸くに極るところは異なるに似たれども、善く誘くところは殊ならず。僕、家を捨てて寺と為し、心を帰すること久し。内典を助けむが為に外書を加え置く。地は是れ伽藍、事須らく禁戒すべし。庶くは同志を以て入る者は、空有に滞ること無く、兼ねて物我を忘れ異代来らむ者は、塵勞を超出して覺地

に帰せむことを。

宅嗣は、儒仏の間には明らかに区別がある、しかしそれは窮極に於て「善く誘く」ところであつて一致するものだと考えた。その要は「空有に滞ること無く」「物我を忘れ」「塵勞を超出して」「覺地に帰」する事である。この点に於て儒仏は相助けるものだと考えるのである。儒教の政治的庇護、更に古い仏教の政治原理への応用、この両者の広汎にして長い受納が、一般の教えを受ける人々の心の中にかかる自己処理を起さしめたのは当然であらう。淡海三船は更に仏弟子となつて鑒真に帰依した。年足の願文の中にも儒教的思考は見えた。これやかれやを生み出した奈良朝末期の思想界は、逸早く憶良によつて文献化されたものを、より徹底せしめたものだけに違ひない。

それだけではない。儒教が既に懷風藻に数々準備されていたような一種の理想主義的解釈をとつて、仏教と手を結ぶに到つたとすれば、かかる理想化の極点が宗教的な神秘への憧憬となり、ここに老莊の入りこむ場所が設けられることとなつたのである。

この事を作品について當ててみよう。その作は経国集に賦一篇、詩一首、東征伝に詩一首、万葉集に短歌一首を残す。経国集巻一に見える小山賦は小島憲之氏によつてその前半が唐太宗の小山賦（芸文類聚地部）による事の指摘されているのだが、

夫れ四序の交代するや万古を経て以つて私無し。草は春

に逢って花錦に、樹夏に入って葉帷たり。秋氣悲しく実を落し、冬風急にして枝を空しうす。

と、四季の自然なる状を述べる事から始まり、それを

節物の此くの如きを觀て世人の盛衰を覺る。瀛岳を聞くも觀ることなく、帝郷を望むも期し難し

の如く受取る。「瀛岳」とか「帝郷」とかという言葉に現われるような神仙思想の上に、世人の盛衰を見るのである。

山爲るの進む在るを顧み 實を覆ふの移らざるを想ふ、事孰れか貴あらん。

この盛衰觀は、いつてしまえば一種の無常觀となつていてといえよう。小山の賦である以上、ここまでは一つの序であつて、次を持出す爲の言葉の綾たる事は払拭し得ないけれども、單なる表現上の習慣とするには大仰すぎよう。そのような時代は去つてゐる筈である。以下は微軸細流を設けての安靜をいうのだが、その描写は美しい。

雲片へに出でて嶺陰り日半ば出でて谿映ゆ

といった清澄な語句をもって、この一賦が「文学」である事を示しているのだが、更に乱に到つて

四節通に謝つて万物栄枯す。昔を視れば代を異にし後に途を同じくするを知る。高尚心に在つて拗地足り、清淨命に委ねて崑岳蔑む。禽獸群らず何ぞ必ずしも世を避けむ。簞瓢樂しみを為し聃が以つて歳を卒ふ。為して恃まらず孰か其の徳を知らん。燕処超然として唯道是れ則る。

と全篇を取纏めて思想の帰趨を示すのである。結局は、崑岳

を蔑み避世を否定するのだが、その根柢を「高尚心にある」事に求めねばならないという「何ぞ必ずしも」といわねばならないそもその立脚点を考えねばならない。これは崑岳を肯定しているのである。この思想は懷風藻の中にも既に見られた。しかしそれを上述の如く自然界の推移に含まれる無常觀から求めたものはなかった。そこにこの賦の立場がある。

この賦は先の条式とも全く呼応するもので、内省的な態度をとつて、理想主義的儒教が只管現実から乖離しようとする。それは老莊的虚靜に連なる孤高の觀念となつてゐる。本質的な道家思想ではない、無論六朝風な虚無思想としての老莊思想である。既に見た如き字合の「時に遇ふの罕なる」という思想は、同じく高位高官を極めた宅嗣の作と対照せしめなければ解釈のつかないものである。天平ごろから時代を強く蔽つて来た理想主義的儒教の求めた老莊的虚靜だったのである。古代氏族主義社会の崩壊と、貴族主義社会の新しい臺頭という事は、この時代の大きな特色の一つである。かかる時代的苦惱も右を助けているであらう。しかしそれより更に大きく右を助けたものが、先に述べた如き仏教の弥漫であり、儒仏兩道を中核とする「文人」の教養典型が出来上りつつあつたという事である。小山賦の中には文学を失わない描写がある。そして併存して右の思想があるのである。

詩は、經国集卷十に一首「七言。三月三日西大寺に宴に侍する応詔一首」、七律体のもので、上巳宴の応詔詩という類型的な立場のものだが

青糸の柳陌鶯歌足り紅藥の桃溪蝶舞新たなり

という中聯をもつ。和歌的発想に近いものであろう。しかし尾聯

幸に無為に属して梵域實し還有截を知って真を離れずという一韻を忘れてはいない。称徳在祚の折、三十六才から四十一才までの間である。

また東征伝巻末に一首「五言。同じく大和上を傷む」。これは右のごとき描写は全くない。

生死の悲しみ恨みを含み 真如の欲び豈窮らんやという如きものである。三船と共々の二詩は内容も等しいといえる。宝龜十年、撰直後のものならば五十一才である。

万葉集の一首（19四二八二）はその宅の宴歌三首の内一首勝宝五年正月四日、二十五才の作である。同時には茨田王・道祖王が集っている。宅嗣は非常な弱年ながらその歌は平凡ではない。「不相問爾」は「アハヌアヒダニ」（定本等）ではなく「アヒトハナクニ」であろうから「相」という接頭語をもつ。また、この一首は梅を女性に比喩しているものであり、この手法は清河のものと同じく、新しい文雅である。梅の見立てが漢詩の手法であるといわれたのは太田青丘博士であった。<sup>(33)</sup>右の賦や条式に見られたような思想的なものは強く見られないが、さりげない一首の中に寓意を美しく表現して結句「うつろはむかも」の抒情に嘆きを托した点は立派な作といふべきで、完全に和歌化された漢風であったといえる。この宅嗣の一首に流れている弱々しさと、智的な陰翳とは、

そこに由来する印象であろう。

②④淡海三船 三船は万葉集に大伴家持「族を喻す歌」（四四六五―四四六七）の左注に、大伴古慈悲の解任がその讒言なる事を記す中に名が現われるのみで、万葉集の歌人ではない。為にここで取上げるのは不適当かとも思うが、万葉集に關係をもつ万葉圈の一人として、その若干を見ておく。

元三船王といい、勝宝三年淡海真人の姓を賜わる。父は池辺王、池辺王は葛野王の子で、その父は大友皇子となる。即ち天智天皇・額田王の玄孫、大友皇子・十市皇女の曾孫、葛野王の孫、池辺王の子で、以上何れも万葉集・懷風藻に関りをもつ歌人・詩人である（十市皇女のみ作なし）。系統の文学を認めえよう。出生は養老六年、卒年延暦四年、年六十四才。その間、式部少丞・文部少輔・中務大輔・侍従・兵部大輔・刑部大輔・大判事・刑部卿を歴任、地方官としては尾張介・参河守・美作守・近江介・東山道巡察使・大宰少貳・因幡守を経る。宝龜三年大学頭兼文章博士となっている事は注意される。万葉集に記す古慈悲の事件は勝宝八歳五月十日の統紀では「出雲国守従四位上大伴宿禰古慈悲、内賢淡海真人三船、朝廷を誹謗し人臣の礼なきに坐して左右衛士府に禁ず」とあり、その讒によるという事と異り、また十三日には「詔して並に放免す」とあって、解任の事もなかったようである。万葉歌は八歳三月二十日の作の次にあり、四四七〇番の左注には「以前の歌六首」は六月十七日の作だと書かれて



いる。従って正月の事件からは半年距っていて真偽の程は確め難い。しかし三船の一生の記事を追っていると、恵美押勝の乱の時には賊徒捕縛による行賞があり、東山道巡察使の奏聞に際しては譴責をうけている。少くとも平凡ではないようであって、性格的破綻とでもいったものがあつたらしい点もないではない。統紀には「性識聰敏」（神護景雲元年六月）「稟性聰慧」（延暦四年七月）とあり聰慧さの故と、家門との関係（池辺王は從五位下内匠頭）からの行動がなかったとは断言出来ない。名門の貴公子家持の柔かな感受性には、左注のごとき印象を齎した事もあつたろう。

右に文学頭・文章博士たる事をあげたが、統紀には「群書を涉覽し尤も筆札を好む」（延暦四年七月）「文史に明なり」（神護景雲元年六月）ともあつて、その文雅の優たる事を知ることが、作は経国集卷十・唐大和上東征伝卷末・徴古雄抄に詩文をのこす。

（経）五言。内道場に虚空藏菩薩会を觀る一首 称徳朝

五言。聖徳宮寺に扈從する一首 称徳朝

五言。維摩經を聴く一首

五言。藤六郎出家の作に和する一首

五言。南山智上人に贈る一首

（唐）五言。初めて大和上に謁する二首并に序

（古）大安寺碑文一首并に序 宝龜六年四月十日

東征伝 同十年二月八日

即ち七首の詩（内、序をもつもの二）と碑文と伝一書であ

り、東征伝は疑問もあるが、その撰とすれば現存最古の個人の著書の一つとなる。柿村重松氏が石上宅嗣との二人を、「奈良後期の文章に光輝を発揮し、以て平安時代文学再興への連鎖をなしきともいふべきなり」といわれたのは名言である。その内容を見ると、内道場のものと聖徳宮寺扈從の二詩は応詔と思われるもの、和詩と贈詩は私的なもの、維摩經の詩も私的なものと考えてよいであらう。従つて先のものには応詔詩なみの類型があり、後者には比較的自由さがある。内でも注意される事は、「智を尋ねて明智を開き、仁を求めて至仁に至る」という懷風藻以来の形容がありながら、結句「方に知る聖と聖と玄德永く相隣す」という形容がある事である。つまりこれは内道場のものに「是れ空神尚ほ寂たり」とある考え方と等しく、儒教的な觀念と仏教的觀念との結合である。その根底には「我が皇仏果を欽び駕を廻して芳因を問ふ」とある朝廷のあり方から来ているが、この時代の教養のあり方として注目される。時代は称徳朝のものとしか判らないが、天平神護元年から宝龜元年まで、三船四十一才から四十九才までの作である。三船が「元開」と称して仏門に帰依した事は東征伝などに「真人元開」とある事からも知られるが、宅嗣の場合も等しい為に、三船の個人的な好みとはいえないであらう。天平初年はそれを約四十年遡るが、右の状はかの憶良の状と等しい。憶良の中にあつた仏教は、教養とか最高の知識とかがかかる時代的变化の中に、儒教を単独の儒教として存在せしめなくしているのであり、憶良はそれを

忠実に追っているのに過ぎないのである。三船が元開と称する事自体が、かかる好尚と軌を一にするものなのである。その傾向は私的とした他の詩についてもいえる。出家に対して「道を楽しみ心逾々逸し空を安んじ理転に真なり」といい「子に従って囂塵を避けん」というのである。懷風藻の中にはまだこの「囂塵」は世俗や官途を意味しており、隠棲の思想がそれを避ける事であった。ところがここでは、これは単なる在俗の意になり、仏道に入る事を表わすに到っている。老莊的（これ又、本来の老莊ではないが）隠棲から仏道帰依へとこの避塵の語は変化をもつて来ているのである。贈詩に「野人薛衲を披き朝隱衣冠を忘る。思に副ふは何処の所遠く自雲の端に在り」というのはその徹底した様であろう。知己を幽山の千年の桂に求めて、巷側を離れる老莊的隠棲は、仏籬を山中に結ぶことを意味する。これは管見による限り六朝の隠棲ではない。その奈良朝末のわが国の導入のさまがそうだったといえよう。これは先立って憶良をとりまく教養がそうだった事を示唆する点、貴重というべきものである。東征伝末の二詩「弟子跡を囂塵に浪にし」（序）「懷抱埃塵に絶つ」（第二詩）も同じである。

大安寺碑文は四言四十句のものであるが、千五百字にも及ぼうかと思われる長文の序があり、発端老莊・周孔に対する仏教の原理を説き起して大安寺の創興・変遷に及び、現在の盛況を叙す。漢文による叙事文として当代唯一のものである。中でも「信に上京の勝地なり」として

北は平岡を望み 宸耀を紫闕に掲げ  
南は吉野を瞻て 仙氣を碧漢に泛べ  
東嶺嵯峨として 煙風の揺蕩する所  
西阜は隱軫として 日月是に蔽虧す

と記す。四六併儷の対句は二対ずつを二聯として美しいが、歌でいえばあの藤原御井歌にも通じる叙法である。賦における京都讚美、歌における新都讚歌らが、自らこの叙法を決定したと見たのである。

既に見たように、三船には歌はない。宝字三年には三船は三十八才であり、賜姓後既に朝廷生活を始めていた筈であるが、末期の宴集の中にその名を見る事は出来ない。三船の作がおおむね晩年に限られている——知り得る範圍では四十才以後のものであり、その点も憶良と似通うが、もし歌を作ったとしたら、少くとも憶良と等しい立場の歌を歌ったであろうか。この見込みはやや悲観的である。憶良にはたとえ同じような時代性の吸呼や、教養があったとしても、三船にはなかった、藤原朝の伝統があった。若き三船を培ったものは、神龜天平という、最も漢字文学の隆盛を極めた時代だった。そうした中に育った三船と、人麿を同時代人として、漢籍の素養をつんだ憶良とは、時代性や環境を等しくしても、歌にかかわる宿命の度合が異っていた事を考えねばならないのである。歌わざる詩人、三船はそこから生まれたといえる。

## 五 結

以上、万葉集に現われる歌人の内、漢詩・賦・文をもつ作家たち二十人の位置と、その作の示す姿を追って来た。

これを一言で言いつくす事はとても出来ないが、或る場合には全く詩歌がそれぞれの立場を保ちあい、或る場合にはどちらか一方に他を引きつけ、そして或る場合には全く二者渾然と融け合っているものであった。その何れをとるにしてもこれら二十人の作家たちの中には、二つは没交渉であるとはいえない。詩と歌との背馳と求めあいの故に、或いは乖離し或いは融和し合ったものであった。

そして、これらの詩歌の交渉もまた詩歌ともどもの変遷の中に委ねられている。和歌そのものの、時代の含む変化による変貌と、詩そのものが時代から受ける思想内容の変化とが共々にあって、それを一つの時点に立つ作家が、両様のジャンルに表現するという、个性的操作で結び合せているのである。

些かの考察によって、右の二点が明らかにしたとすれば望外の幸せである。

(六一年夏成稿)

註 1 「近江奈良朝の漢文学」一八六頁—一九二頁。

2 岡田正之博士 同右。

久松潜一博士「万葉集の新研究」

林古溪氏「書懷風藻新釈後」釈清潭氏「懷風藻新釈」一六〇

頁・一六一頁。

沢田総清氏「懷風藻註釈」四一一頁・四一二頁（以下、沢田氏の説はすべてこの書による）

世良亮一氏「懷風藻詳釈」二頁—五頁。

杉本行夫氏「懷風藻」三二頁—三二五頁。

柿村重松氏「上代日本漢文学史」二四七頁。

4 3 次田潤氏「抒情詩としての万葉集」万葉集大成七卷一五頁。

前掲書 一八一頁—一八二頁。

5 「蒙求と奈良朝文学」国語国文二十卷一号（以下、水野氏の説はすべてこれによる）ただし小島憲之氏「『蒙求と奈良朝文学を読んで』国語国文二十卷四号 は蒙求の奈良朝文学への投影はないといわれている。

6 「懷風藻新註」（以下、林氏の説はすべてこの該当詩の項による）

7 「書評『懷風藻新註』」国語と国文学 三六卷五号。

8 「日本歌学と中国詩学」六二頁。

9 「万葉の美学」万葉集大成二十卷三八頁。

10 「万葉私記」一部二一九頁。

11 「万葉集と中国文学との交流」万葉集大成七卷三二二頁。

12 西郷氏前掲書（二二〇頁）は詩歌の機能の差異を中心と考えられる。

13 「万葉語の解釈と出典の問題」万葉集大成三卷二四頁・二五頁。

14 「柿本人麻呂と万葉卷十三」美夫君志一号。

15 「万葉語『ハタ』の意味用法をめぐって」万葉二七号。小島憲之氏は他に先掲「万葉語の解釈と出典の問題」一八頁・一

九頁「上代文学と大陸文学」解釈と鑑賞 二十卷九号でも説かれる。

15 「懷風藻——作品の類群的初稿——」国語と国文学三四卷十号（以下、書名を記さない杉本氏の説はすべてこれによる）

16 「懷風藻の詩と六朝詩との関係——出典を中心として——」国語と国文学二七卷九号（以下、田村氏の説はすべてこれによる）

17 註12の論文二七頁・二八頁。

18 「七夕歌と柿本人麿集」万葉二四号。

19 註10の論文三一二頁。

20 「懷風藻の研究」一三二頁。

21 前掲書一七九頁・一九六頁。

22 前掲書五七頁・五八頁。

23 註14の「上代文学と大陸文学」

24 「万葉集・懷風藻より経国集へ」解釈と鑑賞二二卷六号。

25 前掲書一六四頁。

26 この二回の贈歌についての、家持からの先の書があった事を

想像する説がある。第五回のものの中には「先の書に云ふ：と」とあり、それを擬するのである。第六回のもも家持から物を贈った事に対する歌である事は確かだが、それに書状の添っていた事も想像される。もしそうだとすれば私の論旨は一層強くなる。

27 前掲書二六〇頁。

28 小島憲之氏「奈良文学より平安文学へ——異国文学との関係に於て——」人文研究八卷一号。

古沢未知男氏「家持・池主の書（万葉）と劉琨・盧誼の書（文選）」文学・語学六号。

29 小島憲之氏「懷風藻より天平万葉の詩序へ」国語国文二七卷十号・「天平万葉の流れ」国語国文二八卷三号。

30 註24の論文・註28の「天平万葉の流れ」

31 藪田嘉一郎氏「日本上代金石叢考」二五〇頁の本文のよる。

32 註2の「上代日本漢文学史」一二四頁による。

33 註14の「上代文学と大陸文学」

34 註7の前掲書六三頁。

前掲書一九七頁。